

2024

South Korea

文部科学省委託 令和6年度 新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書



公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに4,000人以上の海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは1,000人以上の教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

日韓間の国際交流事業は、ACCU がユネスコの信託基金をもとに韓国ユネスコ国内委員会の協力により「韓国教職員招へいプログラム」として2000年度と2001年度に韓国より毎年50名の教職員を招へいしたのを皮切りに、このプログラムと対をなすものとして、2003年度から日本教職員の韓国への派遣プログラムが始まりました。以降国際連合大学が2002年度から2017年度まで主催した「国際教育交流事業」のプログラムを、2018年度からは文部科学省委託「初等中等教職員国際交流事業」として実施し、これまでに3,000名以上の日韓教職員がお互いの国を訪問しました。

今年度は、文部科学省委託「令和6年度 新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業」の一環として「韓国政府日本教職員招へいプログラム」を2024年7月の韓国現地での対面形式と事前事後研修としてのオンライン形式で実施しました。

参加者は各地域の学校および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課題、日韓両国における教育課題の共通点と相違点を学び、韓国の教職員や児童生徒と交流を深めることができました。このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教職員の理解と帰国後の諸活動を促進し、日韓の教職員間、学校間の交流のさらなる発展の一助となることを願います。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました韓国教育部、韓国ユネスコ国内委員会、文部科学省、訪問先の各学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2025年3月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

目 次

1. プログラム概要	1
2. 参加者による訪問記録	4
3. アクションプランと現在の取り組み.....	28
資料編	77
参加者リスト	77
プログラム関係機関	79

1. プログラム概要

1. 実施の背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコ（UNESCO：国際連合教育科学文化機関）の理念に沿って、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現をめざし 1971 年に設立され、教育と文化の分野においてアジア・太平洋地域の人々と協働して事業を推進してきました。2001 年からは、子どもたちに影響力をもつ学校の教職員を対象にした国際交流事業を開始し、「先生が変わる 子どもが変わる 学校が変わる 学びの場」づくりを担っています。

日本と韓国との国際交流事業に関しては、文部科学省の協力のもとで、韓国から教職員を招へいする「韓国教職員招へいプログラム」を 2001 年より実施し、日本教職員を韓国に派遣するプログラムを 2003 年より文部科学省および国際連合大学の協力のもとで実施してきました。これらの一連の事業は韓国政府に高く評価され、2005 年からは韓国教育部の協力のもと韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）により「ユネスコ日韓教職員対話プログラム」の一環として「韓国政府日本教職員招へいプログラム」が実施されています。これらの事業により、これまでに合わせて 3 千人以上の日韓の教職員が海を渡り、新型コロナウイルス感染症拡大以降も、オンライン上での交流を継続してきました。本年度のプログラムでは、日韓教職員間の友好及び相互理解推進によるネットワーク構築に加え、持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）、地球市民教育（GCED：Global Citizenship Education）、日韓両国が抱える教育分野における課題に関する意見交換や対話の促進を目指しました。また、昨年度に引き続き、現地での対面形式の交流とオンライン形式の事前事後のセッションを組み合わせたハイブリッド型のプログラムを実施しました。

本年度のプログラムは韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）の招へいにより、下記のとおり実施されました。

2. 目的・期待される成果

- 1) 参加者が、ユネスコスクールを含む学校およびコミュニティにおける ESD および GCED に関連する効果的な実践を探求すること
- 2) 多様な文化が尊重される持続可能で平和な社会を築くために、参加者がチェンジメーカーとして必要な資質・能力を培うこと
- 3) 日韓の教職員間のネットワーク構築を強化すること
- 4) 東アジア地域における「平和の文化」の実現に貢献すること

3. 活動内容

- 1) 現在の韓国の教育政策や課題についての講義受講
- 2) 韓国教職員、児童・生徒、教育分野の専門家との交流
- 3) ユネスコスクールを含む教育機関等訪問
- 4) 教育文化施設や一般家庭の訪問を通じた韓国文化の特色に対する理解増進

4. 日程

事前オリエンテーション①：2024年6月14日(金)15:00～17:00(オンライン)
 事前オリエンテーション②：2024年6月29日(土) 13:00～16:00 (オンライン)
 出発前オリエンテーション：2024年7月8日(月) 15:30～18:00
 韓国現地でのプログラム：2024年7月9日(火)～7月14日(日)(6日間)
 振り返りセッション：2024年8月24日(土) 13:00～16:00 (オンライン)
 フォローアップセッション：2025年1月11日(土) 13:00～15:30 (オンライン)

日付	日程	訪問先(形式)	活動	
			A グループ	B グループ
6月14日 (金) 15:00～17:00	事前	オンライン	オリエンテーション① ※韓国ユネスコ国内委員会主催	
6月29日 (土) 13:00～16:00	事前	オンライン	オリエンテーション② ※公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター主催	
7月8日(月) 15:30～18:00	前日	成田空港近辺	出発前オリエンテーション	
7月9日 (火)	第1日目	成田、 慶尚南道	出国(成田国際空港→金海国際空港) 開会セレモニー、歓迎晩餐会	
7月10日 (水)	第2日目	慶尚南道	チルウォン高校訪問 ホームビジット	金海外国語高校訪問 ホームビジット
7月11日 (木)	第3日目	慶尚南道	午前：ミルジュ小学校訪問	午前：チジョン小学校訪問
			午後：慶尚南道教育庁、 ウポ生態教育院訪問	午後：慶尚南道教育庁・ 未来教育院、慶尚南道ウ ィリョン教育支援庁訪問
7月12日 (金)	第4日目	慶尚南道	午前：知恵の海図書館、 幸せ村学校、チャンウォ ン芸術学校、チャンウォ ン自由学校訪問	午前：釜山ソヌウ学校訪 問
		釜山	午後：朝鮮通信使歴史館訪問、ワークショップ① (講演、日韓教職員共同活動)、晩餐会	
7月13日 (土)	第5日目	釜山	ワークショップ②(講演、日韓教職員共同活動)	
			午後：振り返りミーティング、韓国文化体験	

7月14日 (日)	第6日目	釜山、成田	帰国（金海国際空港→成田国際空港）
8月24日(土) 13:00～16:00	事後	オンライン	プログラム内容の振り返り、今後の目標共有など
2025年 1月11日(土) 13:00～15:30	事後	オンライン	プログラム後の実践についてのフォローアップ

5. 参加者

下記の教職員・随行員併せて50名を参加者とする。

- 1) 公募により選抜された教職員もしくは教育行政職員
- 2) 文部科学省、および ACCU の職員

6. 参加資格

- 1) 日本国籍であること
- 2) 韓国入国日から6ヶ月以上有効期限がある旅券を所有していること
- 3) 所属機関の上長等より推薦を受けた、日本の初等中等学校、特別支援学校の教職員もしくは教育行政職員であること
- 4) 国際交流、国際理解教育、ESD、GCED等の活動に携わっている、または強い関心を持っていること
- 5) 自らの教育経験を共有する韓国教職員と積極的に交流をする強い意志があること
- 6) プログラムに対する目的意識を強く持っている者
- 7) 将来にわたり日本と韓国の国際交流、国際理解教育、ESD、GCED等の推進に寄与できる者
- 8) 健康で、オンラインを含めたプログラム全日程に参加が可能であること
- 9) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的にプログラムに参加できること
- 10) EメールやLINE等アプリケーションを用いて円滑に連絡ができ、且つMicrosoft Word/Excel/PowerPointを用いて資料や報告書の作成・提出ができること
- 11) 報告書の提出や事後のフォローアップ（個別インタビューなど）に協力できること
- 12) 日本への入国にあたり事前にVisit Japan Webの登録が可能であること

2. 参加者による訪問記録

A グループ

・事前オリエンテーション（6月29日）

文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長 水野俊晃氏、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）国際教育交流部長 栗林正の挨拶の後に、韓国の教育事情に関する講義が文部科学省総合教育政策局 参事官（調査企画担当）付外国調査係の田中光晴氏によって行われた。講義内容は以下の通りである。

【講義内容（一部）】

・韓国教育基礎情報

日本の文部科学省にあたるのが「韓国教育部」。そして、17の地方広域市と道に「教育監（執行機関）・教育庁」がある。韓国の児童数、生徒数は減少傾向だが、学校数は微増している。高校への進学率は2000年以降70%をキープしている。少子化は進行しており、急速に高齢化が進むと予想されている。2050年には、日本よりも高齢化が深刻になっている。

・韓国の入試情報システム

幼稚園、小学校、中学校、高等学校（私立も含む）での選抜は基本的に行わない。大学入試には、共通試験の成績（約30%）、高校での学習成績や教科外活動について記した学校生活記録簿（内申書）、大学によっては論述や面接の結果の組合せで行われる。

・就職（進路）

就職は年々難しくなっているため、「高学歴化」と「手に職型」の意識が高まっている。在学中にスペックを積むため、自分自身でスキルを身につけることが必要とされている。スペックとは、学歴、英語力、成績、インターンシップ、海外経験、海外での活動などのことである。

・昨今の教育分野に関するトピックス

韓国のナショナルカリキュラム（教育課程）は、およそ6年に1度改定されている。現行の教育課程は2024年3月から段階的に導入され、デジタル要素を強調している。2007年の改定では、「多文化教育」について言及され、2022年の改定では、「創造的な思考力」「自己管理能力」「知識情報処理力」「審美的な感性」「協力的なコミュニケーション力」「共同体力」がKey Competenciesとしてあげられた。授業時数については、小学校は2年間、中学校では3年間で調整することができるようになっている。また、中学校では「自由学期制」が導入されており、教科の学習ではない活動を行う時間となっている。

韓国の教育現場でも、多文化の子どもが全ての学校段階で増えている。しかし、多文化の子どもの比率は、地域によって差があり、近年では、中国やベトナムの子どもの比率が高まっている。多文化教育は重要な課題として取り上げられており、推進モデル校の指定事業（補助金連動）や教育先導教員などの制度を構築するなど、独自教材や資料の開発を進めている。

・出発前オリエンテーション（7月8日）

当日はACCUより『参加者ガイド』に沿って日程・役割分担などの説明を行い、名鉄観光サービスの担当者から翌日の流れや現地の様子などの説明が行われた。その後、歓迎晩餐会にむけた出し物練習や韓国の学校における文化交流授業の打ち合わせなどが参加教職員によって進められた。出発前オリエンテーションは、対面で参加者同士顔を合わせる最初の機会であったが、会話がはずみ、現地でのプログラムへの期待感がさらに高まったという声も上がっていた。



・開会式・歓迎晩餐会（7月9日）

ナ・ウンジョン 教育部グローバル教育政策担当官、ハン・ギョング ユネスコ韓国委員会事務総長より、今回のプログラムの趣旨説明および温かい歓迎のお言葉を頂き、さらにパク・ソンス慶尚南道教育庁副教育監、山本剛駐大韓民国日本国大使館一等書記官より、歓迎及び今回のプログラム開催への祝辞を頂いた。会場には、翌日から訪問する現地の教育機関職員の皆様もお見えになり、各国教職員及び関係者によるパフォーマンスも行われた。日本側からは「幸せなら手を叩こう（韓国語で披露）」、「夢の世界を」を歌い、韓国側関係者は「ふるさと（日本語で披露）」を歌い、「ふるさと」については日韓教職員及び関係者全員でも歌った。



日本の伝統楽器も交えて発表



記念品贈呈の様子

・チルウォン高校訪問（7月10日）

〔チルウォン高校の特色〕

故ヒャンチョン、ユンヒョリャン両氏により「無知、貧困、疾病の打破」という建学精神に基づきハマン郡内に4つの高校と5つの中学校が設立された。その中の一つとして、チルウォン高校は慶尚南道で中心的役割を担っており、「学力を伸長し、未来社会をリードしていく創意的な人材を育成する」という学校目標を掲げて教育活動を行っている。学生自治会の活動は活発で、プラスチックペットボトルのリサイクルによって得た収益金を寄付するプロジェクトなどを行っている。教職員は生徒を支援すべく相談活動を積極的に行っており、障害を持つ生徒についても、知的障害・身体的障害に分け、就業につなげられるように製パ

ンの技術習得やコーヒーのバリスタ資格取得に惜しみない支援をしている。

〔当日のプログラムの流れ〕

- ① 図書室にて歓迎の挨拶・記念品交換・学校紹介など
- ② 授業参観
- ③ 給食体験
- ④ 明德歴史教育館訪問および写真撮影
- ⑤ 生徒によるピアノ演奏会参観
- ⑥ 日本教職員による文化体験授業（高校1年生対象）
- ⑦ 日本教職員と生徒懇談会
- ⑧ ユネスコスクール慶尚南道地域協議会

〔チルウォン高校を訪問した日本教職員の声（一部）〕

チルウォン高校に到着した瞬間、たくさんの生徒たちが教室の窓の外から手を振り、「こんにちは～」と何度も挨拶をしてくれたことが今も記憶に残っている。校内に入っても必ず笑顔で挨拶をしてくれる生徒の様子から、このような生徒を育てるチルウォン高校とはどのような場所なのか、学校内見学や家庭訪問でその答えを見つけることになった。

まず一つ目に、教職員についてだが、ソン・ヒョンジョン校長先生のお話の中に学校理念や生徒に対するお考えが具体的かつ説得力をもって語られていることに感銘を受けた。例えば、来たる未来へ一人で生きていける力の育成については、家庭での子育てのみならず、教育の最終目標がそこにあるという点について、非常に具体的にお話をされていた。日本特有の空気を読む文化とは異なり、言葉を惜しまず相手の様子をしっかりと捉えてお話をされている点が印象に残った。

二つ目に、生徒であるが、自ら進んで参加する生徒がほとんどであった。日本文化紹介の授業では常に笑顔で返事もきちんとしており、そうした日常の姿勢が素晴らしいものであった。授業中、分からない部分があるとまず隣の生徒に聞き、それでも分からない場合は教員に聞くなど、分からないことをそのままにせず、学びに積極的な姿勢が感じられた。



〔ホームビジットに関する参加者の声〕

ホームビジットでは、チルウォン高校に通う生徒のご家族が経営する食堂を訪問した。日本からそれぞれ持参した手土産を渡した後、受入協力家庭からも紙袋いっぱいのお土産をいただき、驚きとともに喜びを感じた。お刺身、サムギョプサル、鴨肉、コチュジャンなど韓国ならではの薬味が数種類、テーブルいっぱいに並べられ食事が始まった。出会って数十分で食事を共にするという事で、初めはぎこちなさがあったが、どの料理をどの薬味につけて食べるか、また、英語で「日本でお刺身は高いと思うからたくさん食べてください」など温かい言葉をかけていただいた。食事後は、食堂から出て少し歩き、皆で画面いっぱいに収まり楽しくプリクラを撮った。その後、カフェへ移動し、建物の大きな窓から見えるマサンとチャンウォンを結ぶマチャン大橋を眺めながら、チルウォン高校での学校生活や生徒会活動、ご家族のお仕事、本プログラムの内容、日本の学校の様子などについて互いに話をした。それぞれコップの飲み物が空になってもまだ話は続き、お互いを知る時間を持つことができた。

ホームビジットを通して感じたことは大きく二つある。一つは、人が人に向ける視線についてである。まず、親が子に向ける視線だ。チルウォン高校の生徒はかなり多忙な学校生活を送っている。ホームビジットの翌週には生徒会長選挙の投票があること、翌々週には夜通し読書した後に生徒同士ディスカッションをする読書イベントがあることを教えてくれた。各生徒が分担してマイケル・サンデルの著書を読むとのことだ。さらに、今月末には日本に研修旅行に来るといふ。事前に受け取ったプロフィールの趣味の欄が空白であることについて質問すると、趣味に充てる十分な時間が無いようだった。映画を見ることを楽しみにしていると教えてくれた。このように親元を離れ入寮し、学業・生徒会・学校行事と忙しい日々を送る我が子に対し、父母が向ける視線を間近に感じる事が出来た。そこには我が子を誇りに思う気持ち、ときに心配も入り混じる気持ちが見てとれた。また、親が教師に向ける視線からも考えたことがある。ご両親が自分の子と私のやりとりを眺める様子を察したとき、ふいに自分が学校の先生であることを改めて自覚した。そして誠に勝手な解釈ではあるが、子どもに良い影響を及ぼす存在であることを期待されているように感じ、日本に戻って子どもたちや保護者と接するときこの気持ちを忘れたくないと考えた。

ホームビジットを通じて感じたことの二つ目は、相手の母語の持つ力だ。そもそも訪問先の生徒さんもそのお姉さんも英語を上手に話すだけでなく、興味を持って一生懸命話しかけてくれて話が弾んだので、とても嬉しかった。訪問するまでは間がもたなかったらどうしようかと心配して、日本の水書き習字セットや坊主めくりをするための百人一首を持参したが、杞憂に終わった。そんな温かいコミュニケーションのなかで実践してよかったと思ったことがある。それは、相手の言語で会話してみるということだ。この研修プログラムの後半でユネスコ遺産教育（朝鮮通信使）について学び、雨森芳洲という人物について知った。そこで少し調べて見つけた彼の有名なことばが私の考えにしっくりくる。

「ことばを知らず如何に善隣ぞや」

この研修中、「私のことばを違う国から来たあなたが話せなくて当たり前」という前提を良い意味で裏切るとき、そこには驚きの、しかし温かく楽しい空気が流れるのを実感した。たとえ一言でも相手の言葉を知り、使ってみることは相手が自分に興味を持ってくれているということ、あるいは、自分が相手に興味があるということを伝える強力なツールになると感じた。

最後に、英語の持つ力を再確認できたこともつけ加えておく。世界における英語の普及は地球市民（世界市民）という概念を支える一つの柱だと思うが、実際に、互いの母語を解さずとも英語でのコミュニケーションが立ち上がれば円滑なフローが生まれる。特に、ホームビジットは年齢の異なる人々が集い、韓国と日本の文化によれば長幼の序を大切にして敬語でのコミュニケーションが求められる場面であった。しかし、英語を用いたことで、初対面どうしの距離はあるもののフラットなコミュニケーションができたと思う。

カフェの壁一面のガラス窓から見たマチャン大橋がとても印象に残っている。マサンとチャンウォンをつなぐと教えてくれたのは訪問先の生徒さんだ。橋はある場所ともう一つの場所をつなぐ。私にはこの橋が本プログラムの比喻のように思える。

・ミルジュ小学校（密州初等学校）（7月11日）

密陽（ミリャン）市にある小学校で、計11クラスで運営されている。シングル家庭・祖父母家庭・異文化家庭が約6割を占めている。以前は、地域からあまり好まれない小学校で、廃校の噂が流れるほどであった。このような問題を解決しようと、保護者と教職員が協力して改革を進めた。この小学校の特色は、「生態運動場」があることである。慶尚南道教育庁から支援してもらい、2023年に新たな運動場を開場した。生態運動場ができたことにより、以前は特定の学年の子のみ運動場を利用していたが、現在では色々な学年の子が遊ぶ場となった。この運動場ができたことにより、子どもたちが自ら試行錯誤してあそぶ環境が生まれ、また、生態系が生息していることで教育活動の幅が広がったという。気候変動危機への対応や、共存について学ぶため、学年の実態に応じた生態転換教育も展開しており、そのような教育課程の中で、自然と触れ合い、協力しあえる、遊びと憩いの空間である生態運動場を活用していた。学校訪問中は、学校内の施設見学や授業参観などを行い、休み時間には生態運動場で様々な学年の子どもたちが遊んでいる様子を見ることができ、学校で飼っているうさぎと触れ合っていたり、小川で水遊びをしたりと、それぞれが自然と触れ合いながら楽しく遊んでいる様子が見られた。

日本教職員による文化交流授業では、体育館で小学2年生を対象に「日本の伝統的な遊び」の授業を行い、前半は、けん玉・めんこ・こま回し・お手玉・あやとりの遊びを体験してもらった。日本教職員から5つの遊びの説明と実演をした後、それぞれのブースに分かれて、子どもたちが自由に遊べるようにした。遊んでみたいブースに、走って向かう姿も見られ、楽しんでいる様子がよく伝わってきた。後半は、全体で新聞ジャンケンを行なった。日本教職員と韓国の児童の2人ペアになり、日本のジャンケンをして、新聞の上に乗る続ける遊び

である。日本の新聞や日本のジャンケン、日本の先生と直に触れ合うことができ、興味津々に新聞を見たり、日本教職員に話しかけたりと、とても楽しそうだった。日本教職員も積極的に子どもたちと触れ合っており、言葉が通じなくても、お互いが仲良く協力し合っている姿が見られ、とても良い雰囲気での文化交流授業を進めることができた。最後は、日本の小学校で行っている号令を全員で行い、授業を終えた。

授業参観では、校内を回りながら、様々な学級や施設を見ることができた。どのクラスも電子黒板があり、韓国では電子黒板の割合の方が大きいとのことだった。また、クラスにスナックブースがあり驚いた。各クラスに決まった金額を割り当てており、それを使って子どもたちと担任が話し合っ、スナックブースを設置しているとのことだった。クラス内専用の通貨を用いて、スナックを買うクラスもあるようで、お金の使い方を学ぶしかけづくりが行われていた。午後は、校長先生・教頭先生・低学年の先生と懇談会を行ない、様々なトピックスに関する意見交換が行われ、学校の特色や韓国の先生方の教育に対する思いに触れる良い時間となった。



↑生態運動場の様子と正面からの
ミルジュ小学校



→文化交流授業の様子

・慶尚南道教育庁、ウポ湿地、ウポ生態教育院訪問（7月11日）

慶尚南道教育庁の方々の挨拶の後、スライドを用いて環境教育について説明を受けた。小学校3年生で湿地の理解を促し、ウポ現地調査をするなど、様々な取組について話を聞くことができた。また、研究サークル（小中高のサークル）が存在し、教員研修プログラムも存在するという。さらに、教育専門職員プログラムで環境教育交流が行われる予定で、ラムサール湿地都市間国際交流（中国、台湾、マレーシア、タイ）を行い、アジア湿地学校ネットワーク（2025）が構築されるとのことである。

ウポ沼環境センターでは、リアルタイムの湿地の映像を見学し、そこに存在する生態系について説明を受けた。また、現地ではニッポニア・ニッポンの学名を持つ鳥「トキ」が水質の悪化により姿を消すなどの現状や課題についても知ることができた。



説明の様子



人口沼を視察

・知恵の海図書館、幸せ村学校、チャンウォン芸術学校、チャンウォン自由学校訪問（7月12日）

2016年にクアム中学校が廃校となったが、都市再生プロジェクトの一環で旧体育館は知恵の海図書館として、旧校舎は幸せ村学校・チャンウォン芸術学校・チャンウォン自由学校として使用されることとなった。訪問時、チャンウォン自由学校は試験期間だったため、授業参観はできなかったものの、a～cの3つの施設を訪問する機会をいただいた。

a.知恵の海図書館

図書館内にステージがあり、年間 50 回以上街のオーケストラや伝統舞踊の発表会や童話会などに利用されることで、地域の文化力向上につながっている。1 ヶ月に 25,000 冊の貸し出しがあり、人が来続ける図書館として、地域の宝となっている。



b.幸せ村学校

学校と地域の有休空間を活用し、学校と村の相互的な学びによって人々の成長をサポートする村教育共同体の学びの場として設立された。



c.チャンウォン芸術学校

絵画・デザイン・漫画アニメ・音楽といった芸術分野への進学を希望する一般系高校 3 年生が入学できる学校である。芸術分野の専門性を高めたいと考える生徒にとって、大変充実した設備が整っていた。ボーカル・作曲・デザインの分野ではパソコンを駆使しており、プログラミングなどを行っている様子が見られた。



d.チャンウォン自由学校

一般系高校 1 年生の中で、より創意的で自律的な教育課程を求める熱意のある生徒を 1 年間預かり、多様な経験を通して学ぶ場を提供する学力認定代案教育委託機関である。自分を発見する自由な挑戦と経験を積むデンマークの「エフタスコーレ」概念の教育課程を採用している。Why・How・What というゴールデンサークル（考え方の習慣）を用いて、常に「なぜそれをするのか」と考えることを起点として学びを深め、学期の終わりには自己評価エッセイで生徒自身が自分の学びを振り返る。学校に関する説明の中では、「教師と生徒は一緒に学



ぶのであり、教師が生徒に勝るという考えはない」といったお話もあり、この言葉は日本教職員にとっても印象的なものであった。

・朝鮮通信使歴史館（7月12日）

難しく思われがちな「朝鮮通信使」というテーマを、誰にでもわかりやすく、楽しく理解できるように様々な技術を活用した展示が用意されていた。映像室では朝鮮通信使の歴史や、関連事業・イベントに関する動画を見せていただき、また、朝鮮通信使の衣装の試着するなどあらゆるかたちで歴史や文化に触れることができた。



韓国民族衣装を試着



入口の様子

・講演及び日韓教師の共同活動（1）：「ユネスコ世界遺産教育と地域で作る平和」（7月12日）

コモドホテル釜山にて、日韓合わせて90名が集い、講演を聴いたり、共同活動を行った。当日は、「韓国教職員招へいプログラム」で2024年1月に宮城県・福島県を訪問した韓国の先生方も参加された。

a. 講演1：「世界遺産の解釈と遺産教育の地域社会連携」

ユネスコ韓国委員会議題政策センター専任専門官のイ・ドンヒョン氏による講演では、ユネスコ世界遺産の定義や、地域社会連携型遺産教育等についてお話いただいた。（以下は奈良市で小学校教諭として勤務されている先生の感想である。）講義の中では、遺産の類似点などの関連性を見つけて他地域にある遺産と組み合わせるという視点で、「古都奈良の文化財」と「百済歴史遺産地区」の組み合わせが紹介されていた。

b. 共同活動1：「私の世界遺産」活動記録作成及び発表

ユネスコ韓国委員会ネットワーク事業室専任専門官のオ・ヘジェ氏より紹介のあった『ユネスコ世界遺産、平和を抱く』（遺産教育の中等部向けの指導書）の中にある、「私の世界遺産」を見つけるワークショップが行われた。私たちが毎日暮らしている場所には、登録遺産ではないけれど「私にとっての世界遺産」となるものがあることに着目し、A4の紙に「私にと

っての世界遺産」を描き、小グループで発表し合った。『ユネスコ世界遺産、平和を抱く』の冊子には、他にも魅力的なワークがたくさん紹介されており、日本の学校における授業でも取り上げたいとの声も上がっていた。



ワークショップの様子



夕食をともにする日韓教職員

・講演及び日韓教師の共同活動（2）（7月13日）

日韓教師の共同活動（ユネスコ世界遺産教育と地域でつくる平和）

この共同活動では、日韓教職員が小グループに分かれて自分が生活している地域（または出身地）にあるものでユネスコ世界遺産として推薦（提案）したいものを発表し合った。参加者同士でのディスカッションや意見交換の場では、韓国語や英語、絵、写真などを交えて日韓教職員が親睦を深める様子が見られた。

講演「ユネスコの観点から見る朝鮮通信使記録の意味と価値」

釜山大学国文学教授のハン・テムン氏による講演では、朝鮮通信使を切り口に、歴史や文化などあらゆる分野について学ぶ機会をいただいた。講演の中では、『『近いからより優しい国』になれるよう、これからも（日韓教職員が）互いに交流を深め、子どもたちに伝えていってほしい。』というお話があり、参加教職員の所属機関における取組への期待が込められたお言葉をいただいた。

日韓教師の共同活動（日韓教職員書画交流）

日韓教職員書画交流において、団扇制作の活動が行われた。これは、「私が描く平和と多様性、持続可能な発展」というテーマで、韓国現地でのプログラムを締めくくる活動として設定され、参加教職員が白い団扇に絵を描いた。本活動の中では、参加者教職員が韓国滞在期間中の経験を振り返り、それぞれの学びを頭の中で整理しつつ絵を描く様子が見られ、多くの教職員が共通して「日韓友好」をイメージした絵を描いていた。活動後には、参加者から「言葉で表現するよりも絵を用いて表現するほうが、平和への意識をより直接的に表現で

きるように感じた」という声もあり、活動中は終始盛り上がりを見せていた。



日韓教師共同作業・書画交流、全体写真の様子

訪問団による各グループでの活動内容の発表

日本教職員訪問団の A・B 各グループの代表が、各地での活動について発表した。

以下発表内容の一部を紹介する。

A グループ：発表者 坂本 交司 先生（奈良教育大学附属中学校）

・チルウォン高校では、施設設備の素晴らしさと生徒たちの積極的な姿勢が印象的だった。
生徒はよく発言し、自分たちで探究活動に主体的に取り組んでおり、先生たちとの距離も近

く、休み時間に SDGs に関するクラブの発表もあった。自主性を大切にする、生徒の笑顔が溢れる学校であった。

・ミルジュ小学校は、廃校の危機から素晴らしい運動場を中心とした学校に生まれ変わった様子に大変感銘を受けた。先生たちが本気でどんな学校にしたいかを話し合い、どの生徒も遊びに来ることができる、様々な工夫のある運動場づくり、温かい学校づくりを目指したとのことだった。生徒だけでなく、地域の方も訪れ、一緒に活動できる開かれた小学校となった。

・知恵の海図書館は廃校が美しい図書館へと生まれ変わった様子に驚いた。図書館としての施設だけでなく、地域を巻き込んだコンサートやイベントなどを行っており、地域の人々の文化の発信地となっているように感じた。

・チャンウォン芸術学校と自由学校は、生徒が思う存分自分の興味のあることを追求する環境が確保されており、「自分とは何者か」などの討論を重ねて、生徒の未来をサポートする体制が整っていた。1 年間だけ在籍校から離れて活動できるシステムは日本にはなく、大きな学びがあった。

・全体を通しては、程度の違いがあるが、日韓教職員は同じような悩み、課題を抱えて、全力で生徒に向き合っていると実感した。ある学校での先生の悩みでは「授業のモチベーションを高めるのが難しいという」という意見が出て日本の先生方も共通であるという意見が多かった。日韓のどの先生たちも子どもたちと社会の未来を考えていることが共有でき、日本に帰国後は「つながること」を大切にしていきたいと感じた。情熱のある先生と、子ども達と、保護者、地域とつながること、そして「教育は人をつなげる動力源。その歩いた道が運河になる。」という言葉が胸に、一滴一滴の水が土に染み込み、大きな運河になることを願い、つながって、今日を始まりの日にしていきたい。

B グループ：発表者 松村 孝幸 先生（多摩市立多摩永山中学校）

金海外国語高校は、地域社会で平和と持続可能な発展を積極的に実践している高校である。生徒のコミュニケーション能力の高さ、積極性を感じた。自主学習が夜 10 時まであり、主体的に勉学に励む生徒が多い。

チジュン小学校は少人数教育ではあるが、それを補うために、オンラインで他校と交流を行っている。アイトークトーク、一人一人を大切にする教育の実践を行っている。

教育庁未来教育院は、「1 人の子供も取り残さない」を目標に、具体的な実践を行っている。1 人の子供のために大人が真剣に考えなければならない。それが大人の責任であるという言葉に感銘を受けた。

釜山ソヌウ特別支援学校は日本と異なり、特別支援のカリキュラムに SDGs との関連という視点は入っている点が新しいと感じた。また、教員だけでなく、専門的家が外部講師として参加しており、豊富な人員スタッフ、施設設備の素晴らしさが日本もそこを目指してい

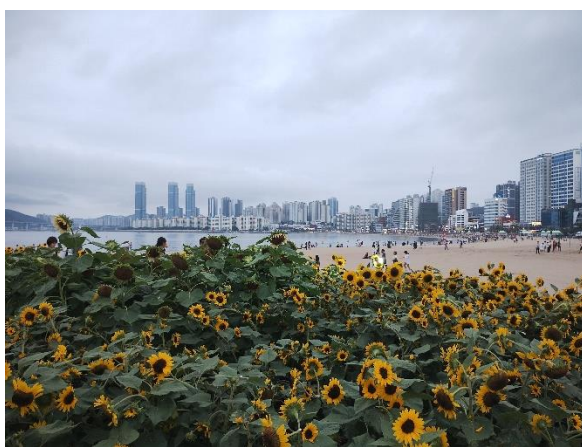
くべきではと考えた。私たちはそれぞれが各学校でチェンジメーカーとしてこの知見を生かしていくべきとの言葉で締めくくった。



各グループの代表者が発表

・文化体験（7月13日）

日韓教師の共同活動、講演、訪問内容発表の後には、各自が自由に釜山の街を散策し文化体験をする時間となった。事前に釜山の案内の紙をもらい、タクシー、地下鉄などを使い、ホテルから釜山の街に移動し、韓国の生活・文化を肌で実感できる貴重な時間であった。



広安里海水浴場
（若者でにぎわうリゾート地）



チャガルチ市場
（水産物水揚げ量が釜山は多いため、海産物が多く売られていた）

B グループ

・事前オリエンテーション（6月29日）

6月29日（土）、第2回目のオンラインオリエンテーションが行われた。文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長 水野俊晃氏、ACCU 国際教育交流部 部長 栗林正から挨拶をいただいた後、文部科学省総合教育政策局 参事官付外国調査係 田中光晴氏による「韓国の教育事情」に関する講義を受けた。講義に関する質疑応答の後、プログラムの目的やテーマの確認、持ち物やスケジュールの確認などの事務連絡が ACCU により行われた。その後、約 5 人グループでワークショップを行い、参加目的や現地での行動目標を共有することで、参加者全員の目的意識を高めることが出来た。

・出発前オリエンテーション（7月8日）

7月8日（月）ホテルマイステイズプレミア成田にて、出発前オリエンテーションが行われた。はじめに、主催である ACCU の 4 名、文部科学省から参加した 2 名、そして名鉄観光の方からの挨拶があり、その後、プログラムの概要説明と、名鉄観光サービスからの連絡などが伝えられた。連絡の確認が終わった後、韓国で日本人教員が披露する出し物の準備を行なった。出し物は、韓国語で歌う「幸せなら手を叩こう」と、日本語で歌う「夢の世界を」を準備し、全体で歌や動作の練習を行なった。出し物の準備が終わると、文化交流授業の準備を各グループに分かれて行い、終わったグループから流れ解散となった。

・開会式・歓迎晩餐会（7月9日）

最初にナ・ウンジョン 教育部グローバル教育政策担当官、ハン・キョング ユネスコ韓国委員会事務総長御両名より開会及び歓迎の辞を頂戴した。その後、パク・ソンス 慶尚南道教育庁副教育監並びに山本剛 駐大韓民国日本国大使館一等書記官の両名から祝辞を頂き、それに対し増田恵津子 日本教職員訪韓団長が答辞を述べた。四半世紀近くも続く本プログラムの歴史とその意義深さを改めて振り返ることができる時間となった。記念品の交換を挟み、歓談の時間となった。晩餐会の乾杯の挨拶は、イ・ソヨン 金海外国語高等学校長、チェ・ビョンソブ 芝正初等学校長、田邊智子 日本教職員訪韓団 B グループ代表が行った。宴の後半では、日本教職員団が「幸せなら手を叩こう」の韓国語バージョンと、「夢の世界を」の合唱を披露した後、文部省唱歌のひとつである「ふるさと」を本プログラム韓国関係者と日本教職員団と一緒に日本語で歌った。温かい歓迎を受け、食事をしながら交流を深め、共に歌を歌うという流れの中で、日韓友好の架け橋となる決意を新たにした。



・金海外国語高校訪問（7月10日）

① 金海外国語高校について

7月10日（水）金海外国語高校へ訪問した。金海外国語高校は男女共学の全寮制、公立の外国語特殊目的高校で、厳しい選抜を勝ち抜いた生徒が集い、卒業生の25%がソウル大学を含む韓国の主要10校に進学するエリート校である。生徒達は英語、中国語、日本語のいずれか2言語を専攻、学習しており、クラス分けは専攻言語によってなされている。この学校では、①Graceful Citizen（気品ある市民）② Intelligent Youth（知的な若者）③ Modest Partner（謙虚なパートナー）④ Future-oriented Cosmopolitan（未来志向の若者）⑤Liberal Leader（習慣と偏見にとらわれない）以上の①～⑤の頭文字をとってGIMFL（キムフル）を育てたい人物像として掲げている。地域と国への愛に基づくグローバルリーダー育成、持続可能な世界市民の育成、未来教育実現のため、具体的な策を講じている。

②プログラムの流れ

到着後、はじめに体育館で歓迎会が行われ、全校生徒から拍手と笑顔で出迎えを受けた。歓迎会では、イ・ソヨン校長先生の歓迎のご挨拶や、生徒からの探究活動の成果発表、ダンスの発表などがあった。

歓迎会后、視聴覚室にて2年生を対象に、実践女子学園中学校教諭の東敬祐先生、桜美林中学校・高等学校教諭の亀山勇先生より、それぞれの学校での教育実践についての講演「平和と共存」があった。

その後、学校概要の説明、学校施設の見学をした。リモデリングされたばかりのカフェは、親元を離れて暮らしている生徒たちのために、種類豊富な自動販売機が設置されていた。また、現校長先生の提案で、拡大された生徒の集合写真が廊下に飾られていた。競争の激しい韓国社会では、メンタル不調を訴える生徒も多いということで、保健室やカウンセリング室などの施設が充実していた。施設見学の流れで、食堂にて給食をいただいた。食事後に校内を歩いていると、多くの生徒たちが日本語で話しかけてくれたことが印象的である。

午後には、はじめに授業参観をおこなった。内容は、グループごとに決められたテーマについての探究学習であった。生徒たちは探究活動の中で、PCやタブレットを使用しながら、活発に議論を交わしていた。探究のために多くの書籍を読んできたという生徒もいた。

授業参観後には、体育館で韓日教師懇談会をおこなった。主に、韓日の教師が互いについて質問したいことを付箋に書き、質問し合うという内容であった。その中で、韓国の先生方からは、日本の先生の給与、定年、勤務時間、また子どもたちの学校外での教育状況や自習時間などについて質問があった。日本の教職員からは、韓国の子どもたちは自習時間があまりにも長すぎるのではないかと、アクティブラーニングをどのように取り入れているか、道徳の授業はあるか、などといった質問が挙がった。懇談会は終始和やかな雰囲気で行われ、両国の教師が、それぞれに対して抱いていた率直な疑問を共有できる場となった。



② ホームビジット

金海外国語高校の訪問後、日本人教師が2～3人のグループになり、金海外国語高校に在籍する生徒の家に家庭訪問をさせていただいた。家庭訪問では、それぞれの訪問先でもてなしを受け、生徒のご家族と一緒に食事をとった。家庭訪問で経験させていただいたことはグループによって異なるが、食事の準備などから、訪問団を歓迎しようとしてくださる気持ちが本当によく伝わってきたことは共通していた。どのご家庭も、とても温かい雰囲気の中で日本教職員を迎え入れてくださった。

家庭訪問の中では、自己紹介や、互いの趣味についての話、韓日の文化や興味のあることなど、様々なことについて話をすることができた。また、家の様子から、韓国での生の生活に触れ、日本との違いを感じることができた。

・芝正（チジョン）初等学校訪問（7月11日）

自然に囲まれたのどかな環境の芝正初等学校では、まず、日韓の旗を振るかわいい子ども達とドローンによる「お会いできて嬉しいです」という日本語の垂れ幕という到着するなり目頭が熱くなる歓迎が校庭で待っていた。歓迎式では校長先生、生徒会長の挨拶の他に児童による太鼓の演奏があり、その迫力に惹きこまれた。授業見学や懇談会を通じて、芝正初等学校が少子化に伴いかつては1,000名ほどだった児童数が10名まで減少しているということ、生徒減少によって起きる問題を改善すべく「子どもが愛されるデジタル宝島学校」というビジョンのもと、慶尚南道宜寧（ウィリョン）教育支援庁が推し進める宜寧共有教育を展開し、近隣の同様に生徒数が減少傾向にある学校と、オンライン学校型の共有教育の運営を行っているということ等を説明いただいた。継続的な交流を行うことで、近隣校の生徒との関係を「他校の友」ではなく「頻繁に会うクラスメート」としての親密性を深めながら教育を受けることができるということであった。そこに、個を大切に「ひとりも取り残さない教育を行う」という意気込みが感じられた。またAIが子ども達のレベルに応じて教材を作っており、教員の負担が軽減されているという話を聞き、日本との違いを強く感じた。その後、教育アプリケーション・アイTalkTalkを活用した遠隔交流授業の見学を行った。児童も教員も慣れた様子に、スポット的なものではなく、日頃から交流が行われているということが良く見て取れた。



その後、日本教職員による文化授業を行った。日本の文化を紹介した後、日韓に関するクイズ、日本語での「きらきら星」の歌唱、更には「だるまさんが転んだ」、「じゃんけん列車」をして遊んだ。すぐに日本語で歌えるようになった姿に、子どもの吸収力は凄いものだと感心させられた。給食体験でサムパプをいただいた後、教職員との懇談会で交流を深め訪問を終えた。

・慶尚南道教育庁未来教育院・宜寧教育支援庁訪問（7月11日）

「未来教育テーマパーク」として2023年にオープンしたばかりの未来教育院は、斬新な外観の建物が一際目を引いたが、施設の中はそれ以上の驚きの連続であった。まず、慶尚南道独自で開発された、ビッグデータ・AIプラットフォーム並びに、教育アプリケーション・アイ TalkTalk について説明を受けたのだが、芝正初等学校訪問でアイ TalkTalk の活用を目の当たりにしてきたばかりの我々にとって非常に興味深い内容であった。児童生徒に与えられたタブレット端末で行われた学習データが、本院のデータセンターに集約された後、AI 処理され個別最適化した情報として子ども達の端末にフィードバックされており、これまでの児童・生徒の学習過程の蓄積データを活用できているとのことであった。施設見学においては、体験施設で現地の高校生が実習を受ける様子を見ることができた。「体の動きをロボットに画像解析させ、同様の動きをロボットにさせる実験」「プログラミングによって模型自動車を自動運転させる実験」「VR 技術によって、映像効果を体験する実験」などが各ブースで行われていた。この施設が巨額の公的資金で作られ、運営されているということを聞き、教育への投資のあり方の日本との違いを見せつけられた感じであった。



次に、宜寧教育支援庁では、教育支援庁の主な業務について説明を受けた後、やはり本日の芝正初等学校訪問で我々が大いに注目した宜寧共有教育についてのお話を伺った。過疎化が進む管内の地域で、子ども達の孤立と断絶を克服する協力的な教育課程を実践するために、地域教育協力体制を強化し、未来型教育課程モデルを実現・実践している裏には、関係者の並々なぬ思いと努力があるということが強く感じられた訪問となった。

「ひとりの子どもも取り残さない」為に、複数校でのオンライン交流授業を年40回を数える周期性・日常性を持ったものとして運営することや、対面での交流、行事の共同開催などにおいて積極的な支援を現場に提供する姿勢に感銘を受けた。その姿から、我々大人が諦めず状況を打破していくことの大切さを学んだ。



・釜山ソヌウ学校訪問（7月12日）

① 釜山ソヌウ学校について

7月12日（金）釜山ソヌウ学校を訪問した。釜山ソヌウ学校は知的障害のある児童・生徒のための私立の特殊学校（日本の特別支援学校）である。2008年に開校し、現在小学部6学級、中学部3学級の計9学級に48名の児童・生徒が在籍する、釜山の中では一番小規模な特殊学校である。「夢と希望と一緒に育み、広い世界に踏み出す幸せなソヌウ人」を教育目標に掲げ「正しく考え、行動し、自立しよう」の校訓のもと、持続可能な開発教育と世界市民教育に力を入れている。2020年よりユネスコスクールネットワークに参加し、SDGsの目標に関連する様々な活動を行っている。また、学校が地域社会に貢献する形で、電池やペットボトルのふた集め等を行っており、地域社会との協力関係も釜山ソヌウ学校の特色の一つである。



② プログラムの流れ

到着後、歓迎式があり、そのあと日本教職員は各教室に分かれて児童・生徒と対面した。そこから運動場での「朝チェンジ（体仁智）」に参加し、テコンドー講師による身体活動プログラムを体験した。

その後、SDGsに関連した授業を見学した。中学部3年の教室では、持続可能な消費と生産のための環境にやさしい石鹸づくりが行われていた。中学部1年の教室では、3Dプリンターを利用したネームキーリング作りが行われていた。この授業で直接指導に当たっていたのはICT教育を専門とする外部の講師であった。小学5年生は運動場で黄土を利用したハンカチの染め物を行ったあと、黄土の上を裸足で歩く体験をしていた。体育と美術を融合した授業だった。

授業参観後には日本教職員が3つの教室に分かれて文化授業を行った。A班では、紙風船と吹き戻し笛で遊んだあと、けん玉遊びを紹介し、児童と紙コップけん玉を作成して一緒に遊んだ。B班では紙飛行機、かざぐるま、吹き戻し笛、お手玉、福笑いなどの遊びを用意し、それぞれの児童が選んで遊びを体験できるようにした。C班では日本の子供達が模様をつけた模造紙を用いて、皆で協力しながら巨大折り紙で鶴を折る活動を行った。はじめから積極的に活動に参加する子どももいれば、遠巻きに様子をうかがう子ども、一つの活動に没頭する子どもなど、児童・生徒の反応は様々だったが、お互いに一緒に過ごすうちにその子なりの楽しみ方や関わり方がわかり、短い時間の中でも心通う瞬間を感じることができた。

文化授業の後に昼食をいただき、その後に韓日教師懇談会が行われた。この質疑応答では、日本教職員から「外部講師は日頃からよく活用しているのか。」「韓国にも個別の支援計画はあるか。」「卒業生の進路はどのようなになっているか。」「自立活動はあるか。」といった質問が挙がり、韓日の特別支援教育の共通、相違点や、ソヌウ学校の地域と連携した教育活動について学ぶことができた。

・朝鮮通信使歴史館訪問（7月12日）

朝鮮通信使歴史館は2011年4月に開館された比較的新しい施設で、館内には現代的な設備が整っていた。マルチメディアなどを使った多様なコンテンツを見ながら、朝鮮通信使について学ぶことができるという特色があり、訪問の最初には、映像資料で朝鮮通信使の歴史について学んだ。衣装体験コーナーでは、一部の参加者のみではあるが着用が叶い、貴重な体験に喜び一杯であった。他にも、プロジェクションマッピング技術を取り入れた映像ギャラリーや、韓国の伝統遊びを体験できる広場等もあったが非常に短時間の訪問となり、じっくりと見学ができなかったことがとても残念であった。しかし短い時間の中でも、文化や技術の交流を通して、互いを理解し尊重する姿勢が生まれること、そしてそれが平和の維持につながるということを再確認することができた。そこから、我々の今回の訪韓における使命を改めて感じる機会ともなった。



・講演及び日韓教職員の共同活動（1）（7月12日）

7月12日（金）の午後にコモドホテル釜山にて、ユネスコ韓国委員会議題政策センター専任専門官のイ・ドンヒョン氏より世界遺産に関する講演を受けた。

講演では、はじめにユネスコ世界遺産についての概要説明がなされた。世界遺産制度の始まりは、エジプトのヌビア遺跡を水没の危機から救おうとした運動にあり、ここから、顕著な普遍的価値（OUV）を持つ遺産を常に保護すべき必要性が提起され、1972年にユネスコ世界遺産条約が創設されたことを学んだ。この条約には、2024年までに、195か国が加盟しており、2024年7月の時点で、世界では1119件の世界遺産が登録されているとのことである。さらに、日韓の登録件数は、日本が25件、韓国が16件であるとのことである。

次に、ユネスコ指定遺産区分および概念について説明があった。遺産は、世界遺産、無形文化遺産、世界記録遺産の3つに大きく分けられる。世界遺産は、さらに文化遺産と自然遺産に区分され、両方の要件を満たせば複合遺産となるが、日本と韓国には複合遺産の例はないとのことであった。世界遺産は有形で大きいもの、動かせないものが対象であり、OUVがあるかどうか重要な基準となる。無形文化遺産は、共同体レベルでどれだけアイデンティティがあるのかが重要な要件となる。世界記録遺産は、アナログまたはデジタルで記録され、今は消失されたけれど、上の世代から継承されたものが対象である。世界遺産の保護にあたっては、1国だけではなく世界で連携する必要がある、世界遺産条約加盟国は、分担金を負担したり、情報を提供したりするなどの義務を負っている。また、世界遺産委員会は毎年1回開催され、そこでは新たに世界遺産に登録するかどうかなどが協議されるとのことであった。また、10個の世界遺産登録基準についても説明があった。

世界遺産の概要説明後、世界遺産解釈の問題についての話があった。世界遺産は、その中に「ストーリー（価値）」を秘めており、遺産の解釈の方法の違いによって、一つの遺産にさまざまな価値が存在するため、価値観が衝突することもあるなど、世界遺産についてあらゆる視点から学ぶ機会をいただいた。遺産教育の重要性に関する説明の中では、遺産は世界市民の価値、多様性を教育できる重要な素材であり、地域社会を生かす上で記録遺産を活用

することが大事であるということ、また、遺産教育によって、相互尊重や、平和の文化を達成することにつながるということを学んだ。世界遺産登録による観光客増加、気候変動への対応、地域社会活性化と地域住民の生活への影響についてどのように対応すべきかを考える事例として、ベリーズの珊瑚礁や、コロナ禍により観光客が減って水が綺麗になったベネチアの例が挙げられた。遺産教育の実際として、ユネスコでは、オンラインコンテンツをリリースしたり、ユネスコスクールの活用を促したりしていることの紹介があった。また、EUが示す8つの革新的教育方法や、地域社会連携型遺産教育の際の考慮事項も共有された。地域社会連携型遺産教育の事例としては、3種類の遺産が残る韓国のアンドンの事例やマレーシアのジョージタウンの事例が紹介された。

最後にまとめとして、参加者に「遺産教育に活用できる地域社会の遺産には何があるか」「日韓親善交流のために活用できる遺産は何か」「望ましい未来世代育成のために遺産教育が目指すべきものは何か」という問いかけがなされた。本講演を通して、改めて世界遺産に対する理解を深めるとともに、教育現場で世界遺産をどのように活用することができるのか、ということを考える貴重な機会となった。

・共同活動『「私の」世界遺産（活動誌作成と発表）』

参加者に配布された、世界遺産をどのように教育に生かすかについてまとめた遺産教育の中等部向けの指導書『ユネスコ世界遺産、平和を抱く』の中から、「私の世界遺産」を見つけるワークショップを行った。私たちが毎日暮らしている場所、ふるさと、勤務地には、登録遺産ではないけれど「私にとっての世界遺産」なるものを見つけることができる、ということで、参加者それぞれがA4の紙に「私の世界遺産」を紙に描き、グループで発表した。各グループでは多様な「私の世界遺産」が共有され、プログラム終了後には参加者全員分のものを共有していただき、世界遺産や身近な地域について思いを馳せる機会となった。



・講演及び日韓教職員の共同活動（２）、韓国文化体験（７月１２日）

ワークショップでは、２つの講演を拝聴した。まず、釜山大学 ハン・テムン教授による「ユネスコの観点からみる朝鮮通信使記録物の意味と価値」は、前日の歴史館訪問で学んだ内容を、更に掘り下げて理解することが出来る貴重な講演であった。『近くて遠い国』ではなく『近いからより優しい国』になれるよう、これからも互いに交流を深め、子どもたちに伝えて言うて欲しい。」という教授のお言葉が胸に強く刻まれた講演であった。次に、釜山文化財団文化遺産チーム長 キム・ヒョンスン氏による「遺産と地域社会をつなげた教育：朝鮮通信使記録物を活用した釜山文化財団の教育活動の事例」では、財団が釜山市から予算を貰って運営されていることや朝鮮通信使が復活したいきさつなどを時折笑いも交えながらお話いただいた。質疑応答のやりとりの中で、より良い日韓関係、日韓交流を進めて行く上での教育の重要性を再確認することになり、身が引き締まる思いであった。両講演共に、朝鮮通信使への深い理解を促すと同時に、平和な文化交流への願いも込められた素晴らしい講演で、有意義な時間となった。

次に、共同活動として日韓教職員書画交流・団扇制作活動が行われた。独学アーティストであるオ・ヘジェ ユネスコ韓国委員会ネットワーク事業室専任専門官が「私が描く平和と多様性、持続可能な発展」というテーマで、本プログラムでの学びを総括するために企画してくださったもので、このプログラム中に得た学びを言葉や絵で表現することの困難さに戸惑いを感じながらも、参加者ひとりひとりがそれぞれの思いを込めた作品を作り上げた。完成後は各テーブルで団扇を手に



日韓両国の参加者たちが和気あいあいと語り合い、写真を撮り合う姿が見られた。絵を用いることで、参加者各自の平和への意識をより直接的に表現することが可能となり、その結果、他の参加者の思いも直感的に感じられる素晴らしい企画であった。

歓送昼食会では、日韓の教職員、日韓ユネスコの職員の方々とこの研修における思い出等を楽しく語りあった。余り交流が出来ていなかった、他グループの日本の教職員の方々ともお話することもでき、嬉しく感じた。また、他グループの訪問先であった学校の韓国の教職員の方々とも初めてお話させていただき、大変有意義な交流となった。

日韓教師懇談会は、日本教職員の報告会から始まった。A グループは奈良教育大学附属中学校の坂本交司先生が報告を行い、『「教育は人をつなげる動力源 その歩いた道が運河になる。」という言葉に胸に、一滴一滴の水が土に染みこみ、大きな運河になることを願い、繋がって、今日を始まりの日にしていきましょう。」という素敵な言葉で締めくくっていただいた。B グループは多摩市立多摩永山中学校の松村孝幸先生が報告を行った。慶尚南道宜寧教育支援庁において『「ひとりの子どもも取り残さない』を目標に具体的な実践を行っている。ひとりの子どもの為に大人が何ができるかを真剣に考えなければならない。それが大人の責任である。」という言葉に感銘を受けたと述べられたのが印象的であった。最後には、「参加者それぞれが各学校で、チェンジメーカーとしてこの知見を生かしていかなければならない。」とまとめていただいた。その後続いた質疑応答の中では、今回の研修で結ばれた縁が持続的に続いて欲しいということや、日韓の学校間の交流が更に活発になって欲

しいという願い、また生徒と一緒に作業・協働することが教育の原点であるということ等が再確認され、すべての参加者が決意を新たにす時間となった。

会の締めくくりに、日韓代表のスピーチが行われた。まず、日本の訪問団より増田恵津子日本教職員訪韓団長が感謝の辞と、来年日本に韓国の先生方をお迎えすることへの期待感を述べられた。「平和を繋げることが私たち教員の使命ではないか。(日本で) 子ども達から何故韓国の先生方が訪問されるのか、と質問されたら『みんなで平和な世界を作っていくために来るのだ。』と答えたい。」と感動的な言葉で締めくくった。次に文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 英語教員免許・研修企画室 法規係 室岡 優輔係員から様々な思いを実践に繋げていくことの重要性が述べられ、まとめとして「ここにいる日韓教職員の皆さんは現代の朝鮮通信使である。東アジアに平和を繋げていこう。」と呼びかけられた。最後に、ユネスコ韓国委員会 ソ・ヒョンスク 知的連帯本部本部長から「What? Why?」を常に問い続けながら、互いの差や違いを理解し、お互い認め合っていくことが必要である。では How?・それについては対話を増やすことが重要である。」と述べられ、このプログラムの継続の重要性を強調された後、「このプログラムの主役は先生方です。両国で繋がっていきましょう。」と締めくくられた。終わりに、訪韓初日に歓迎晩餐会で披露した合唱を、今回の私たちの活動にご尽力頂いた全ての方々への感謝の気持ちを込めてもう一度歌い、散会となった。



そして、この日の最後は、韓国文化体験であった。臨時首都記念館、釜山のマチュピチュと言われる甘川文化村、海雲台ビーチ、広安里海水浴場、国際市場、チャガルチ市場などそれぞれが各人格様の場を訪れた。歴史に触れ、現地の人々に触れ、コミュニケーションを図る



ことで日本との共通点や相違点を発見する貴重な時間となった。また、共に研修に臨んだ仲間と現地の名物を楽しむ夕食を共にしながら、韓国滞在を振り返りお互いの経験を共有する参加者も多かった。

3. アクションプランと現在の取り組み

対面プログラム終了後、参加者は韓国での学びや知見、教職員のネットワークを活かして自身に何ができるか考え、アクションプランを作成しました。本頁から各参加者のアクションプラン作成までの経緯や思い、また実現に向けた現在の取り組みを報告します。

参加者が作成したアクションプランは ACCU ウェブサイトに掲載しています。
右の QR コードからぜひご覧ください。



※以下参加教職員氏名は敬称を略して記載する

増田 恵津子

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

「教育は様々な政策をつなげる動力である」

廃校の体育館から生まれ変わった地域の魅力ある図書館を見学しました。急激なスピードで少子化が進む韓国は地域の特色を出すために様々な工夫をしています。少子化問題は日本にとっても避けては通れない問題の一つです。政策を待つのではなく、教育が政策をつなげる動力になるという考え方を今後の教育活動の基盤に取り入れていきたいと考えました。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

- ① 帰国後、本校の教職員、地域の方々に本プログラムの紹介のプレゼンを行いました。また2025年1月に行われる韓国教職員の受け入れについても説明し、ホームビジット先を募りました。保護者からも教職員からも楽しみにしているという声を聴くことができました。
- ② 兵庫県立大学看護学部の学生さんたちや地域の方々向けに『育てて、働いて、交流する 私とアジアの国々』という演題で講演を行いました。これまで生活したり、訪問したりした国の地域の医療や健康問題について話すことで、国際看護の観点をもっといただくことができました。
- ③ 本市は他市に比べて外国人児童生徒等の人数がそれほど多くないためなのか、きめこまやかな支援スタイルが整っていないことが以前から気になっていました。そこで「外国人児童生徒等の日本語指導者養成研修」に参加し、そこで学んだことを本市に持ち帰り、次年度研修を行う予定です。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

- ◇7月帰国後すぐに所属全校生徒へ訪韓報告レポートを作成、発表した。
- ◇8月チルウォン高校の生徒&キム先生（私のホームビジット先）東京で再会！
- ◇9月モザンビーク（世界最貧国）の中学校と on-line 授業、国際交流を実施！
- ◇10月「江戸の鳶木遣」を合唱コンオープニング全校で歌う♪（東京新聞取材）
- ◇11月「江戸の鳶木遣」天祖神社（駒込）、大國魂神社（府中）へ。訪問研究
- ◇12月 訪韓釜山、創立 30 周年記念ミュージカル「明成皇后」を観劇
釜山ドリームシアターでカルチャーショック衝撃を受ける！！

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

- ◇韓国交流レポート第2弾を作成中！
- ◇世界最貧国と言われる「モザンビーク」の学校とのやりとりも体験して分かってきた事。それは「心の豊かさ」や「幸せ」の形についてだ。「裕福」かどうかは、あまり関係がないのかも知れない。もっと多くの国々と国際交流を行ってみたい。
- ◇日本人として日本の文化、日本のよさや魅力を紹介できなければ、真の国際交流とは言えない。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

東京都立の海外学校間交流推進校として、以下の取り組みを行う。

- ①ハングルに関する学びを週に1回以上行う。
- ②韓国の高校とのオンライン交流を月に1回以上行う。
- ③希望者対象で韓国への研修旅行を年に1回行う。

＜なぜ取り組もうと思ったか＞

私自身が韓国への留学経験があるが、韓国の人々の温かさ、人を大切にする心を知ってほしかったから。また、昨今のk-カルチャーの人気により高校生がこれまでにないくらい韓国へ関心を持っているため、若者同士の直接的な交流をしたいと考えたため。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

①・・・東京韓国教育院の協力のもと、週1回の放課後講座（料理・韓服体験・語学等）及び教育課程内でハングルの授業を展開した。

放課後講座は徐々に研修旅行参加者のための内容になってしまったため、次年度以降は、気軽に参加したい生徒の意欲を掻き立てる内容としたい。

②・・・研修旅行で実際に会うことになっている高校とのオンライン交流を学期に1回ずつ、実施した。しかし、こちらは放課後希望、先方は授業時間内希望、など互いの時間を合わせる事がなかなか難しかった。

③・・・令和6年12月25日～29日まで5日間の日程でソウルを訪問し、2校の高校と交流活動を行った。交流内容としては、両国の文化紹介・ユンノリ、けん玉等の互いの伝統遊びの紹介、両国のカルチャーに関するクイズ大会・日韓グループでのホンデの街歩きなどであった。希望者は1泊のみではあったが、ホームステイも行った。

交流校は、今回の派遣プログラムで知り合った学校ではなかったが、今後は交流の幅を広げたい。また、ソウルだけではなく、プサンの学校とも交流を進めたい。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

①日韓伝統楽器交流

- ・韓国の学校でも韓国伝統楽器を祭で演奏することなので、日本と韓国の伝統楽器の情報交換を行ない、交流を深める。
- ・自分の指導する目黒区立小学校2校の和太鼓部（大江戸原町太鼓、大江戸烏森太鼓）の演奏動画・写真を送る。
- ・チルウォン高校、密州小学校、芝正小学校での伝統楽器の演奏動画・写真を送ってもらい、和太鼓部の児童に見せて韓国伝統楽器に興味を持たせる。
- ・伝統楽器を通して相互に関心を持っていく中で、インスタグラム、ユーチューブ等を通して、双方の学校生活・一般の生活で知りたいことを交換し合う。
- ・東京都にも韓国伝統打楽器（チャング）の教室があるため、チャングを自らも習い、韓国伝統楽器への理解を深める。

②日韓交流クラブでの交流

- ・勤務校の日韓交流クラブで、児童に韓国について教えたり、一緒に調べたりする中で韓国について児童が関心を高めるとともに、日韓の児童・生徒との交流を深めていく。

③ホームビジットした家庭と交流継続（カカオトークを中心に実施）

- ### ④知り合いになった韓国の方々と交流継続（メール、LINEを中心に実施）
- （韓国ユネスコ委員会、韓国教育部、韓国教職員の方々）

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

①日韓伝統楽器交流

- ・自分の指導する目黒区立小学校2校の和太鼓部（大江戸原町太鼓、大江戸烏森太鼓）の演奏動画・写真を撮影済。
- ・密州小学校と交流を開始済。Youtube に和太鼓演奏動画を掲載し和太鼓を紹介していく予定。
- ・韓国伝統打楽器（チャング）の教室に行き、チャングの演奏体験、韓国伝統音楽の歴史、仕組みを学んだ。

③日韓交流クラブでの交流

- ・勤務校に、特設クラブとして日韓交流クラブを設立済。2学期は韓国の社会、地理などを児童と一緒に調べ、話し合いながら学んだ。児童に簡単な韓国語を教えるだけでなく、自己紹介・クラブ紹介動画を韓国語で作成し、Youtube に掲載済。3学期は教室、展覧会、体育館など学校の様々な場所、行事の紹介動画を作成して掲載予定。

④ホームビジットした家庭と交流は継続中（カカオトークを中心に実施）

- ### ⑤知り合いになった韓国の方々と交流継続中（メール、LINEを中心に実施）
- （韓国ユネスコ委員会、韓国教育部、韓国教職員の方々）

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

1 勤務校で、韓国訪問の内容を生徒に紹介する

生徒が韓国について知る機会を設けることで、韓国に興味を持ち、日本と韓国との関係にも関心を向けるようになると思ったから。勤務校はユネスコスクールでもあるので、ユネスコ憲章をより多くの生徒が知り、考えるきっかけにもなったらいいと思ったから。

2 韓国で知り合った人たちと連絡を取り続ける

当初、学校間の交流ができたとは思っていたが、自分自身が韓国について知らないことが多いと思ったから。韓国の人についてより理解を深めたいと思ったから。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

1 勤務校で韓国訪問の内容を生徒に紹介した

- ①所属学年の3学年の学年朝会で10分程度スライドを使ってプレゼンテーションをした
- ②ユネスコ部員に同様にスライドを使ってプレゼンテーションをし、その後感想を聞いた
り、ディスカッションをしたりした。

2 韓国で知り合った人たちと連絡を取り続けている

- ①韓国の学校の先生と、月に1回程度のメールのやりとりであるが、細々と続けられている。
- ②ホームビジットでお世話になったご家庭に、日本からお菓子を送ったりした。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

韓国では、朝鮮通信使歴史館を訪問した。朝鮮通信使は室町時代から江戸時代にかけて、朝鮮から日本へ派遣された外交使節団であるが、今回の韓国訪問もお互いの文化交流という面では非常に似た側面があると感じた。朝鮮通信使を通じて、歴史だけでなく、多文化の理解にも適している。小学6年生の社会「世界のなかの日本とわたしたち」の小単元「日本とつながりの深い国々（韓国）」では、韓国と日本が室町時代から文化の交流を続けてきたことから、現代のお互いの文化について考える機会となる。韓国の写真や学校の様子などを紹介して、日本との違いに気づくようにして、自分たちの文化でぜひ伝えていきたいものを考えることで異文化理解につながると考えた。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

小学6年生社会科の「世界の中の日本とわたしたち」単元で「日本とつながりの深い国ぐに（韓国）」をテーマにした授業を実施した。授業の中心は、朝鮮通信使を通じて日本と韓国が文化的に深いつながりを持ち、現在の日本文化の礎となった多くの文化が韓国から伝わったことを理解させることだった。

授業では、研修時に撮影した写真を活用し、韓国の文化や生活について振り返りながら、子どもたちが「似ているところ」や「違うところ」を発見することに重点を置いた。その中で、韓国とは単なる隣国ではなく、文化的にも深いつながりがあることに気づき、相互理解を深めることができた。また、韓国の文化に触れることで、自分たちの日本の文化を再認識し、どのような日本の文化を世界に伝えたいかを考える機会を持った。

この授業を通して、子どもたちは異文化に対する理解を深め、韓国との関係について意識を持つようになった。また、自分たちの文化に誇りを持ちながら、それを他国と交流し伝えていく大切さを実感している。最終的には、韓国との歴史的なつながりを再確認し、今後も日韓が文化的に交流し合うことの重要性を認識することができた。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

項目 1：韓国の先生方との交流のその後

- ①韓国で知り合った先生方とフォローアップ交流を行い、実現可能な交流形態を模索する。
- ②韓国の先生とは翻訳アプリ、英語、または日本語で交流し、お互いを知ることが出来た。実現可能な交流形態について相談し、2024 年の 9 月、2025 年の 3 月からそれぞれハイブリッド交流、対面交流を計画中
- ③継続的に連絡を取り合い、Gmail や Kakao トークでは 12 人の先生方と定期的（月に 1 回以上）は交流中。来日したチルウォン高校の先生や金海高校の校長先生の紹介で知り合った先生たち（7 名）と日本で交流。その後も継続的に交流中。
- ④9 人の先生方（4 つの高校と 2 つの中学）とはオンラインやオフラインでの交流を開始。個人的に YouTube やテキスト、韓国ドラマなどで韓国語を少しずつ勉強している。英語が話せるので海外ではあまり苦労はしないが、やはり交流相手の母語をある程度理解できることは重要だと認識中。

項目 2：国内の先生方との交流のその後

- ①国内の先生方とネットワークを維持し、今後の活動についてお互いに報告し、コラボ可能なものがあれば計画する
- ②SNS でその後の取り組みや事後研修について情報交換を実施。韓国とのオンライン・オフライン交流、訪問交流でコラボ可能な企画や実施形態を相談中。
- ③まだ他校とコラボできる状態の企画がないので、検討中
- ④2025 年 3 月以降に新たに交流を希望している学校もあるので、来年度（韓国は 3 月から新学期）コラボできるものがあれば打診する予定（オンライン交流に参加してもらって夏や冬に一緒に訪韓する、など）

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

- ①韓国交流の準備を学内で本格的・継続的に企画する。対象クラスや学年などを検討する。
 - ②国際交流の時間の確保、共同探究活動、有志での国際交流サークルの立ち上げなどは計画済み。対面交流の実現可能性を今後探っていく（予算・時期・HS など）
 - ③9 月から三校 6 クラスの生徒たち（合計 140 人）とオンライン交流を実施
 - ・釜山の高校（1 年生 1 クラス、2 年生 2 クラス）（それぞれ二学期に 2 回）
 - ・ソウル近郊の高校（2 年生 1 クラス、有志グループ）（それぞれ二学期に 1 回）
 - ・ソウルの中学（日本語サークルと英会話サークルの生徒たち）（二学期に 2 回）
- カルチャーボックス（お土産）交換などを実施して、日本のお菓子文化や伝統文化を紹介
- 年末年始に韓国を 8 日間訪問予定（上記の高校二校と 7 月に訪問したチルウォン高校を訪問）

(観光庁主催の「海外研修の付加価値向上事業」の一環。生徒たち4人と参加)

オリジナルプランを企画(学校訪問、交流活動・文化交流、現地学生たちと釜山観光、現地学生たちとソウル日帰り旅行、釜山文化体験、など)→新しい海外研修の形として発表(3月11日:観光庁主催の成果発表会)

④交換留学協定を結び、春休みや夏休みの訪問(授業に参加したり学生たちで探究活動実施)を計画中。また、ホームステイでの短期受け入れも検討中。

→上記の釜山の高校から生徒13名と教員2名が1月に来校予定(1日ホームステイおよび学校体験)

全てにおいて新しい出会いや新しく知ることが多くて、教員生活20年目にしてとてもやりがいを感じています。生徒たちにとって「韓国」は今一番ホットな国で、特に対面交流の希望がとても多いです。外国の生徒たちとパーソナルなレベルで交流することで、楽しみながらコミュニケーション力をのばし、困難を乗り越え、お互いをリスペクトする姿勢を身につけています。また、平和で明るい未来を実現することの意義を肌で感じていることが、彼らの目の輝きや交流後に発する何気ない一言からも感じられます。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

短期交換留学制度について考察したが、背景には生徒たちの生活力を身につけさせたいという想いがある。

日本は福祉が充実している側面がある反面、引きこもり、アダルトケアチルドレンなどの問題点があり、自立の観点から不安要素が多い。国際交流が閉ざされた世界での生活を打破するきっかけとなれればと思う。第一歩としては学校間交流が生まれることが望ましいが、その先にアルバイトをしながらの短期留学制度があれば、出会った（マッチングした）学校間でできたらと考える。また、訪問した、しあわせ村学校やチャンウォン芸術学校においても生徒数が少ないという課題が挙げられていた。せつかくの充実した施設、設備を備えた学校なのだから、学校存続のため、韓国訪問の際に参加した日本教師とのつながりを持ち交流ができたらと願う。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

まずは学校間交流をしたいのだが、マッチングできる学校が見つかっていない。

相手校が探せたら総合学科高校の原則履修科目である「産業社会と人間」という授業の中で文化交流をしたいと思っている。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

私は今回、総合的な探究の時間を利用した韓国文化についての探究授業をアクションプランとして考察しました。具体的には、まず私たちの国である日本を知ることから始め、続いて韓国文化について調べ学習を行います。その際、今回の韓国訪問のプログラムで学んだことを生徒たちに共有し、最終的には日本文化と韓国文化の比較のために、韓国の高校生とオンライン交流をし、相互の異文化理解につなげられたらと考えています。

なぜこの考察に至ったかという点、今回のプログラムの中での、チルウォン高校での日本文化の授業と高校生との交流がきっかけです。韓国の高校生たちは日本文化に対して強い関心を持っており、日本文化の授業も非常に反応が良かったです。これは日本の高校生たちにも共通する部分であり、近年の K-POP ブームや韓国ドラマなどの流行により、韓国に興味関心をもつ生徒たちが多いです。また、韓国語を学びたいと考えている生徒もおり、本校には韓国語の授業はないので、このような探究授業を通して、生徒たちが韓国文化についての興味を深め、視野を広げる機会になってくれたらいいなと考えました。私が今回のプログラムでたくさんの良い出会いがあったように、生徒たちも素敵な出会いやつながりを是非作ってほしいと思い、このようなアクションプランを考察しました。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

今回のプログラムでの活動や経験は、担任をしている学級で共有しました。しかし、本校では、2年次より自ら設定した課題に向けての探究授業が始まるので、現在はまだアクションプランの実践には至っていません。よって、次年度の総合的な探究の時間の学習計画を練っている段階になります。韓国の高校との交流に向けて、マッチングする学校があるかどうか、オンラインでの受け入れ体制はどうかなどを検討し、自己の韓国語の習得や向上などに力を注いでいるところです。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

いつでも、誰でも自由に見られる場所でプログラムについて紹介できたらと考え、職員室廊下での掲示と昇降口モニターの活用を計画しました。生徒・教職員ともに外国の学校について知る機会はなかなかないため、まずは興味を持ってもらえるよう、視覚的に楽しめるものにしようと考えました。

また、活動内容について、自分の実感をもとにより具体的に知ってもらうため、そして韓国について、日本について考える機会としてほしいと思い、教職員・生徒への対面での報告も計画しました。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

アクションプランをもとに、4つの形式で活動報告を行いました。

①掲示物の作成

韓国の基本情報から学校活動や給食について、韓国語クイズ、朝鮮通信使についてなど、生徒に興味を持ってもらえるような内容で掲示物を作成しました。

②昇降口モニターでの活動紹介

韓国での活動を紹介するスライドショーを作成し、生徒昇降口にあるモニターに一定期間映しました。生徒たちは登下校時や授業の合間などに足を止めてよく見ていました。

③教職員への報告

現職教育の中で、教職員へ活動報告を行いました。特に、試験制度の違いや高校まで給食無償化ということへの驚きの声が多く、学校活動への質問もいくつか挙がりました。

④事務職員研修会での報告

生徒への対面での報告ができなかったため、代わりに近隣校が参加する事務職員研修会で活動報告を行いました。このようなプログラムに事務職員が参加することが稀なため、興味を持ってもらえたと思います。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

①学校間交流

交流するという漠然とした内容から具体的にどのように進めるかを検討する.

i) 言語; 英語 韓国

ii) テーマ

目標 A 共通のテーマで定期的に交流

本校での取組 (交流準備)

身近な自然 藤前干潟見学

SDGs について No. ごとのグループディスカッション

目標 B 校内行事 (文化祭等) 互いの文化祭を紹介

本校の取組

文化祭紹介 DVD を作る

目標 C 人権について行動する

本校の 取組

ピンク T-シャツデーを実施する

iii) 交流校 チルウォン高校他訪問校

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

課題

- ・現任校にて、現在担当 (教育相談) を代わりに担う教員がいないため、現在はオブザーバー的立場での国際交流への関わりであること. 来年度は担当になれる方向ではある。
- ・どこも同じ課題を抱えていると思うが、積極的に国際交流を進めたい教員が国際担当と私と常勤講師 (来年度は正規採用で他校へ) の 3 名しかいないこと。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

1 職員への校内研修

国際理解教育や、その他の教育活動を実施する中で、まずは教員自身が国際的な視野を持つべきだと思ったからです。

最近では、国際家庭や外国籍の児童生徒が当たり前のように学校に在籍しています。その子達への理解や支援だけでなく、周りの子が、他国の文化を理解し、尊重し合うことの大切さを教えることが教育現場で必要だと感じています。だから、今回の研修で学んだ事や感じたことを、まずは職員に伝えることで、職員自身が外国の文化について少しでも興味・関心がもてるきっかけになればと思い、校内研修を考案しました。

2 全学年への異文化理解授業

本校は、小中一貫校であり、特認校でもあります。9学年と他地区の児童生徒がいる中で、児童生徒が互いの違いを認め合えるような児童生徒を育成していく中で、異文化理解教育は、自分との違いがはっきり分かり、児童生徒にも「互いを尊重することの大切さ」を教えるのに適切だと感じました。また、社会科や道徳など、様々な教育活動の中で「平和」についての学習があります。子供達にとって、身近な友達に関しては考えやすいですが、世界の人々となると考えることが難しくなります。そこで、今回のプログラムで経験したことや感じたことを子供達に伝えることで、視野を広げた「平和」について考えてもらいたいと思ったため、考案しました。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

1 職員への校内研修（8月校内夏季研修にて実施）

① プログラムの概要 ②各訪問機関での学び ③日本文化授業・交流 ④韓国での食事 ⑤その他上記の5つについて報告会を実施しました。プログラム期間中に体験したことや知ったことだけでなく、自分が感じたことを主に話しました。事前準備として、韓国で撮った写真をスライドにまとめたものを用意しました。動画も時折入れながら、実際に韓国の様子を見てもらいました。韓国に行ったことがない職員も多く、メディアからの情報ではない「生」の情報が聞けて、新たな発見があったという感想などあり、興味をもっていただきました。また、日本の文化には何があるのか、日本の良さにはどんなものがあるのか、自国にも目を向けることができた機会になりました。

2 全学年への異文化理解授業（7・9月に実施）

7月 小学部（低・中学年）

韓国とはどんな国だろうか？という子供達の興味から、訪問した小学校や町の写真を見たり、実際の紙幣を触ったりしながら、韓国という国を知ってもらいました。

7月 小学部（高学年）

よりよい世界を目指すために、世界で問題になっていることについて話し合いました。そして、韓国での取り組み（持続可能な社会を目指すための取り組み）について、訪問先でそれぞれ実施していることを紹介しました。

9月 中学部

世界平和や共生するためには、互いの違いを尊重することが第一歩であることを伝え、韓国と日本の共通点や違いは何か、訪問先で撮った写真や動画を見ながら、韓国についての授業をしました。韓国に興味をもっている生徒も多く、「訪問してみたい」「自分で調べたい」という感想がありました。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

《アクションプラン》

朝鮮通信使について考えることができた経験を、校内研修で伝える。校内だけでなく機会があれば、校外・県外でも教育に関わる人たちに伝えたい。

これは、自分が実際に朝鮮通信使歴史館に訪れて、韓国側から見た「壬申戦争（文禄・慶長の役）」を背景としたうえで、朝鮮通信使がいかに平和に貢献したものであったかということを考えることができたからである。そういった視点を持って先生方が歴史の授業をすることで、私の経験を子どもたちに広げていくことになると思ったのである。歴史学習における教材観の変革、それが指導観の変革につながり、授業の質の向上につながっていくだろう。

また、日本では「平和学習」というと、やはり広島や長崎の原爆をテーマに学習することが多いが、朝鮮通信使をテーマに平和学習をすすめることも選択肢のひとつになりうると考えた。残念ながら奈良には朝鮮通信使に関わるようなものが無いが、ルート上の地域には遺跡や関連行事が残っているところもある。そういった地域や韓国とも交流をしながら朝鮮通信使をテーマに総合的な学習の時間を使って探究的に学習を展開することも可能であろう。国際理解・交流につながる優良な教材であると感じるのである。私自身は担任を持っていないので、実践は行っていないが機会があればやってみたいし、私が伝えることで実践を行う先生が出てくるかもしれない。

最後に本校の教員はステレオタイプやコンサバティブな教員が多く、教育に対しても内向的であり、またそこで育つ教員もそうなりがちである。そこで、私の経験で少しでも視野を広げることができればと考えたこともアクションプラン考案の背景である。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

朝鮮通信使を伝えたいことの中心として、校内研修で自校の教員に伝えた。6年生の担任からは、「朝鮮通信使」という言葉自体は聞いたことがあっても、理解が浅かったので教科書で本当に1文ほどしか出てこない言葉だが、理解が深まって授業をすることができたとし、日韓双方の視点から考えさせることにもつながって、歴史学習として日韓のことだけでなく、お互いの立場から考えるきっかけとなって授業の質が高まったという言葉をもたらしている。また、奈良教育大学が中心となって行っているESDティーチャープログラムの講師として鹿児島にいった際にも参加者の先生方に伝えることができた。今後も機会があれば、広めたり実践したりしたい。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

アクションプランの内容

- ①日本の文化（特に文学）を海外の人に伝える内容の授業を考えて、実践する。
- ②様々な国籍・年齢・業種の人と積極的に交流し、自分自身のコミュニケーション力を磨く。
（ユーモア、伝えたい内容のインプット、語学力向上）

アクションプラン考案の背景

韓国での研修は、新たな挑戦への原動力を与えてくれました。研修後、高校国語の授業で、日本文化を海外の人に伝え、国際的な文化交流を深めること挑戦してみたいと考えました。これからは小さな挑戦を積み重ねて、自分自身のコミュニケーション力をさらに磨き、生徒により豊かな学びの場を提供できるよう成長したいと考えています。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

高校3年生の日本語探究の授業で「これまでに学習した作品を取り上げて、日本の古典の魅力を海外の人に伝える」という単元を考え、実践しました。「これまでの古典学習を振り返り、日本の古典の魅力を言語化する」という目標のもと、生徒達は好きな作品を選んで3分程度のプレゼンテーションを考えました。パワーポイントで作成したスライドに英語で説明を吹き込んで作成した動画をYouTubeで公開しました。以下は生徒作品の題名と感想です。

【作品名】「Interesting points of WAKA」「The Tale of Genji」「Attraction of Kagerou Diary」など

【生徒感想】

- ・日頃の授業では、現代語訳や文法が中心となった学習ですが、今回の単元を通してその物語の人物や背景について詳しく知ることができました。
- ・俳句の「季語」など、日本人には字面だけで大まかな意味が伝わるような言葉も、いざ海外の人に伝えるとなると表現が難しいことに気が付いた。
- ・言語や文化が違う人への発信を想定して、魅力を伝えるとなると、日本人には当たり前のことについて理解してもらえない可能性があることを考慮しなければならなかったので、情報の取捨選択や伝え方に工夫する必要があることを学んだ。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

今回のプログラムに参加し、様々な学校や施設を訪問する中で、特に環境教育について自身の勤務校とのギャップを感じた。持続的な学びの場を整備する上で、学校所在地周辺の環境は欠かせないものである。そこで、その環境について生徒に主体的に考えてもらえるようなアクションプランを考案した。

- ・プラン名：体育×環境教育 ～受動的になりがちな長距離走を主体的に～
- ・プラン考案にあたっての条件等

自身が専門とする保健体育の授業内で行えることを条件にプランを考案した。結果、体育の種目の中でも生徒の主体性を引き出しにくい持久走・長距離走の単元内で行うことが最善であると判断した。

- ・対象：中学1年生～高校2年生（持久走選択者）
- ・概要

勤務校は大学キャンパス内に位置し、街中にありながら池や森といった自然環境が残っている。そのため、水鳥をはじめとした野生動物が校内でも見られる。しかし、人口増加や気候変動の影響で、周辺環境が変化する可能性がある。

そこで「学校と周囲の環境を持続可能なものにするにはどうすればよいか」という問いを生徒が主体的に考えられるような活動を企画する。

- ・実施方法

体育の長距離走の単元を利用して「キャンパス内を走りながら生態調査を行う」というアプローチをとる。本格的な調査ではなく、生徒が学校周辺の環境に目を向けるきっかけを作ることが目的とする。

- ・事前準備

大学キャンパス内の森や池などの情報をもとに安全面を考慮し、調査ルートを設定。

- ・調査方法

設定したルートを全員で走り、途中に設けたチェックポイントで班ごとに生態調査を実施。各チェックポイントでは自由に観察や記録を行い、大学内の生態状況を推定する。

- ・考察方法と着地点

調査で得た結果を事前講義で扱った地域の環境課題やデータと照らし合わせて分析。

調査結果を学校内外で発表し、意見交換を行う。

国内外の提携校への発表も視野に入れ、生徒の視野を広げる機会を創出する。

- ・期待される効果

この授業を通じて得られる効果は、生徒が学校周辺の自然環境に目を向けるきっかけになることです。普段の生活では気づきにくい環境の変化について意識を持つことで、身近な自然や環境問題について深く考える姿勢が育まれることを期待しています。

また、体育の長距離走と生態調査を組み合わせることで、運動しながら学びの楽しさを体験できるのが大きなポイントです。

調査結果は、学校内外で発表し、他者と意見交換をすることができればと考えています。もし実現できれば、生徒たちにとって異なる視点や文化に触れる機会となり、視野を広げる貴重な経験になると思います。一連の授業を通して、生徒たちが環境問題を身近に感じ、主体的に考える力を育むことを目指します。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

今年度は評価対象外となる3月に、中学1年生を対象として、上記のアクションプランに基づいた実践を予定しています。この実践では、生徒たちが主体的に学び、考える機会を提供することを目的とし、成果発表に偏らず、プロセスそのものに重点を置いた活動を行う計画です。具体的には、学校周辺の植生や動植物について調査し、その特徴を把握した上で、市や県が保有するデータと比較しながら環境の現状を評価する活動を実施します。この過程を通じて、生徒たちは自身の身近な環境について新たな視点を得るとともに、持続可能な社会を構築する上での課題意識を育むことを期待しています。

成果発表の機会については、次年度の学校祭や校外向け発表会で掲示形式による報告を予定しています。この形式を採用することで、生徒たちが自身の活動を振り返りながら整理し、他者に分かりやすく伝える能力を養うことを目指しています。また、こうした活動を今後も継続・発展させるため、本校特設科目である「STEAM」や「データサイエンス」との連携を深め、次年度以降はこれらの学びの場を活用しながら、より高度で実践的な活動へと昇華させることを目指しています。

さらに、成果を学校内に留めるだけでなく、国内外の団体や教育機関とも積極的に共有する取り組みを進める予定です。たとえば、本校が主催する「高校生国際会議」はその一例であり、毎年、国内外の高校生や留学生が一堂に会し、課題解決型のプロジェクトに取り組む場を提供しています。今年度の会議では、生徒たちがSDGsの各分野から興味を持ったテーマについて自主的に研究し、発表を行いました。参加者はSSHコンソーシアム東海に所属する国内高校生に加え、海外からの留学生や名古屋大学の留学生も含まれ、異文化交流や視野拡大の貴重な機会となっています。

今後の展望としては、今回のプロジェクトを通じて連携が生まれた韓国の学校や国内の学校とも協力し、地球環境問題や教育の課題に関する議論や意見交換を行う場をさらに広げたいと考えています。このような取り組みを通じて、生徒たちは自らの学びを深めるだけでなく、他者との協働や多様な視点を取り入れる重要性を実感することができると考えています。これにより、国際的な視野を養い、将来的に広く社会で活躍できる人材の育成につながることを期待しています。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

- ・8月26日（月）にノンサン高校の生徒とオンライン交流を行う。その前に本校の生徒に今回のプログラムに参加して学んだ韓国の今についての紹介レクチャー（韓国のカフェ文化、高校生の勉強量、生徒様子）を行い、交流に弾みをつける。
 - ・11月に千葉県高教研 ESD 部会の教員研修があるので、経験共有を行う。
 - ・千葉県高教研 ESD 部会で実施する生徒研修会（次年度）で「世界遺産」についてのグループワークを考えたい。
 - ・美術の授業で韓国と日本がつながる東洋美術史を取り入れたい。
 - ・ホームビジットをさせてもらったチルウオン高校の生徒とは個人的には連絡を取りたい。
- c. 「b」にむけた具体的なプロセスや必要な対応、取り組みについて
- ・管理職への報告と計画、資料作り、韓国史の勉強（ハングルも頑張りたい！）

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

報告会の実施

- ① 8月26日 ノンサン高校との交流（オンラインとリアル）前に訪韓情報を配布
- ② 11月21日 千葉県高教研 ESD 部会の教員研修にて（10校13名参加）
- ③ 11月25日 校内で海外研修教員の講話会を実施
（中国、韓国に研修に行った教諭3名で全校生徒960名に実施）
- ④ 11月27日 高校生日韓交流に参加した生徒による報告会（アートに絡め美術の時間に実施）

これからの予定

美術の授業で韓国を含めた東洋美術史に触れる。1年立体で、ハニワについて実施しようと思う。

世界遺産についてのグループワークは次年度の夏の研修会で実施する。

チルウオン高校の生徒に対して連絡をつけられていないので手紙を書きます！本年度中に！それが韓国語を学ぶ一助にもなると思うので（汗）

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

持続可能な未来(=平和)を実現するためには、お互いの国の生活や風習、文化を理解し合い、自分自身の無知や知らず知らずのうちに持っている偏見(固定観念)に気づき、未知のものをありのまま受け入れる姿勢が大切だと感じました。政治とは切り離されたところで小さな交流を積み重ねていくことが平和の実現のために私にできることだと思い、次の4つを考えました。

1. 本研修での経験を生徒に紹介する授業(2024年11月)
…私自身のこれまでの韓国とのかかわりや本研修で得た学びを生徒に伝えていく。
2. 訪問先のご家族との交流
…ソーシャルメディアでの交流だけでなく、もう一度遊びに行く。
3. 全国の先生方との交流、情報交換
…研修中に知り合った日本各地の先生方と交流を続ける
4. 韓国の政治・文化・言語について自主研修

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

1. 本研修での経験を生徒に紹介する授業(2024年11月)

未来講座*で以下の2本立てで本校の生徒20名に対して90分間の講義を行いました。

【第一部】'24日韓教師対話研修報告

私自身がどのように韓国と韓国語に興味を持ち、韓国人と出会い関わってきたかに始まり、7月の本研修の報告(高校の授業、給食、施設、文化交流授業)の様子、さらに、訪問先の高校の生徒会選挙について、YouTubeの動画やInstagramの写真を見せて活気ある様子を伝えました。

【第二部】ハングルの読みをマスターしよう

ハングルが合理的な成り立ちをした人工的に作られた文字であることから、ルールを学べば短時間でも読めるようになると考え、ハングルの読みをマスターさせることに挑戦しました。まず基本母音を紹介し、その文字を用いた単語を読んでみて、同様に子音、濃音、激音、複合母音、パッチムを扱いました。講座の最後に生徒は自分の名前をハングルで書くことに挑戦しました。

*本校で毎年開催している、職員の趣味や自主研修を教科や学年関係なく行う90分の講義・実習。対象は1,2年生約350名で各自参加したい講座を選び受講します。

- 2～4. 訪問先のご家族との交流、全国の先生方との交流、韓国について自主研修

現在も、訪問先の家族に限らず、これまで知り合ってきた韓国の友人たちとソーシャルメディアで交流を続けている。また、研修中に出会った日本の先生方ともやり取りをつづけることができている。韓国語学習は数年お休みしていますが、様子を見て再開したいと思っています。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

① 生徒への発表

生徒たちが簡単に海外の情報にアクセスできるようになった今こそ、教師自身の生の体験やそのとき感じたこと、学んだことなどを伝えるのはとても大切だと思ってい、設定しました。

② 校内研修発表

今回、様々な角度から学校運営について学ばせていただき、考えることができました。その学びを先生方と共有し、一緒に考えることでより良い学校が作れるのではないかと思い研修会を実施して頂きました。

③ 市・県での研修発表

校内だけでなく、校外の先生方とも共有することで地域全体の教育の質向上に貢献すると思いい、機会を設けていただきました。

④ 韓国の学校との交流会と姉妹校づくり

相手校の文化がより深く理解でき、また新たな疑問が湧いてきました。より繋がりを強化し、一緒により良い教育について考え、実践していきたいと思い設定しました。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

① 生徒への発表

帰国後すぐ、自身の授業にて生徒達に研修発表をしました。どのような場所を訪問したのか、どんな人と出会い、どんなことを学んだのかについて発表しました。韓国に関心を持つ生徒は多いことから、発表終了後も多くの質問をもらいました。

② 校内研修発表

①の内容に加え、学校・教師として今後どのような取り組みをしていく必要があるのかについて発表をしました。運動場を中心とした学校改革実践については大きなヒントを頂いたように思います。管理職や他の先生方と学校施設の工夫という視点からの学校改革もあるのだと共有しました。

③ 市・県での研修発表

②と同じ内容になりますが、様々な学校教育関係者の方と共有することができました。

④ 韓国の学校との交流会と姉妹校づくり

ACCU さんからご紹介頂いた学校と4回にわたって交流活動ができました。実際に訪問した経験を活かして、向こうの教育事情をふまえた活動ができたように思います。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

- ① プログラムで学んだ知識や経験を教材化→高校地理の授業で、総合的な探究の時間で
 - ・自分自身が韓国訪問で体験したことを基に、よりリアリティのある教材、授業実践を行うことを目指したい。
- ② 修学旅行を探究型の修学旅行へ→国内だけでなく海外へ
 - ・異文化理解において現地で体験するメリットの大きさを改めて感じた。
 - ・校内で行う探究を、校外での学びと接続したい。韓国の先進校は地域との協力が厚い。
 - ・海外の場合は費用が高額になるので、関係機関との連携協力が必要。
- ③ ホームビジットの受け入れ先に→日本へ来る外国の方々へ
 - ・現地のホームビジットの中で、生活文化、食文化を学ぶことができた。
 - ・どこまで自身が未知数ではあるが、チャレンジしてみたい。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

- ①について
 - ・体験記が中心であるが、授業担当のクラスと校内の教職員に環流報告をおこなった。
 - ・高校3年生「地理探究」韓国地誌の分野において、韓国訪問でのエピソードを基に「韓国国内で過熱する受験戦争」に関して生徒と問いを立てミニ探究の活動に取り組んだ。
- ②について
 - ・次年度の修学旅行における学習プログラムについて担当教員間で協議中
- ③について
 - ・関係機関の資料を収集中

3. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

海外との交流ではなく、地域との交流に目を向けた。
きっかけは、ミルジュ初等学校の地域に開かれた学校環境づくりを学んだことだった。
こどもの数が減少していく中で、地域に根付き必要とされる学校づくりという視点も大切なのではないかと考えた。

4. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

学校施設の一般開放日や、生徒との交流日を設定するなど。
セキュリティや職員勤務時間の問題もあり、実現はできていない。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

アクションプラン：韓国の学校とのオンライン交流と文化体験旅行韓国訪問中、文化などに直接触れたり、教育現場の生の声を聴いたりすることが、理解を深める上で本当に大切だということを改めて実感した。実際に触れ合わなければ見えなかった側面が多くあり、そうした体験が相互理解を深める鍵となると感じた。このような経験を通じて得られる学びは、私がそうであったように本校の生徒にも大きな刺激となり、単なる言語学習を超えた成長の機会を提供できると考えた。

1. 韓国の学校とのオンライン交流

韓国の同年代の生徒と英語・日本語・韓国語を用いたリアルタイムの異文化交流を実施する。お互いの伝統文化や流行していることを共有する活動や、簡単な言語学習や会話練習を通じ、互いの言語を学んだりする機会を提供する。

2. 韓国文化体験旅行

現地の学校訪問や伝統文化体験を通じ、国対国ではなく、個人としての「人」に焦点を当てた交流を行う。固定観念を乗り越えた柔軟な視点を育成し、異なる文化や生活様式を学び、多文化共生社会での視野を広げることができる。

これらを通じて、国際交流に意欲的な本校の生徒たちが、他者を理解し、尊重する力を身につけると同時に、国際的なコミュニケーション能力を養い、将来的にグローバルな課題にも柔軟に対応できる人材として成長することを目指す。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

現在、アクションプランの実現に向けて具体的な計画を検討している段階であり、生徒たちに「どのような内容で交流をしたいか」について意見を聞き取り、その結果を基に計画を立てたいと考えている。活動報告を聞いた生徒たちからは、以下のような希望やアイデアが挙がった。

- ・お互い第2言語である英語で交流したい。
- ・簡単な韓国語を教えてもらったり日本語を教えたりするなど、言語交換をしたい。
- ・韓国の同年代の生徒と「学校生活」や「趣味」についてお互いに紹介し合いたい。
- ・お互いの国の勉強スタイルを丸1日体験してみたい。
- ・韓国の伝統文化やスポーツについて学び、日本の文化も紹介する活動を行いたい。

これらの意見を取り入れながら、活動内容を具体化することを目指す。また、韓国の教育庁の方と連絡を取り、交流方法などについてアドバイスを受け、計画を少しずつ進めるところである。今後は、パートナーとなってもらえる学校を行き来しやすいソウル市内で探し、交流に関する具体的な合意を得ることを最優先に進めたい。また訪問する場合には、訪問先のリサーチや体験内容を生徒たちにとって実り多い体験になるよう計画を丁寧に立てたいと考えている。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

2023 年より本校 2 年生 ACF コース生徒 60～70 名が修学旅行で韓国へ行き、韓国のユネスコスクールである観光高等学校と東国大学を訪問させて頂いている。昨年は初回ということもあり、文化交流を行い韓国の伝統の遊び「ユンノリ」を体験し楽しく交流できた。今年度の韓国訪問では、チルウォン高校での生徒の皆さんの授業を見学させて頂いたが、韓国でも SDGs をテーマとした社会課題のグループ発表や、文化祭や地域連携の中でプラスチックゴミを減らす生徒主体の活動に大変感銘を受けた。本校でも週 1 時間「グローバルスタディーズ」という授業で SDGs の各ゴールについてグループ学習をおこなっており、観光高等学校の生徒の皆さんも SDGs をテーマにした紙芝居などを作成しているということで、修学旅行中での訪問時に、生徒たちの SDGs をテーマとした学びの発表会を行いたいと考え、アクションプランを設定した。生徒の発表会は本校では、校内発表会として行っているが、その内容を韓国の生徒の皆さんと共有することで、世界共通の社会課題について対話を行うことは、それぞれの生徒たちにとって大変貴重、かつ有意義な機会であり、これを一過性の学びとするのではなく、生徒たちや私自身にとっても、この G.S の授業を深化させていきたいと考えた。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

今年度の 12 月の修学旅行は私は引率ではなかったため、実際の訪問はしていないのだが、事前のオンライン交流（11 月）と生徒の発表内容のサポートや事前学習などを行った。グローバルスタディーズの授業では、1 年生から SDGs について学び、前期で SDGs についての概要、後期でグループに分かれて、ゴールを 1 つ選び探究学習を行い、3 月にプレゼンテーションを行っている。その後、2 年生では個人の探究学習として将来大学など学びたい分野と SDGs を関連付けて、社会課題を 1 つ取り上げ英語でエッセイを書くこととしている。今回は 2 年生の韓国訪問であるが、1 年次で取り上げた内容を再度韓国の生徒の皆さんに発表するという形をとった。加えて、同じグループで学校紹介のプレゼンテーションも行い、各グループでスライドを作り発表した。韓国の生徒の皆さんには大変好評であったと聞いている。また交流授業だけでなく、事前にオンラインで韓国の生徒とグループを作り、それぞれ日韓の高校生で流行っていることや日韓の文化、アニメや音楽などについて交流していたため、韓国で初めて対面で交流した際も非常に和やかに、すぐに打ち解けることができていたようである。3 時間という短い滞在時間であったが、最後のお別れの時などは涙ぐむ生徒や、一緒に日本に行きたいとバスに乗り込む韓国の生徒もいたようで感動的な交流会となったようである。今後は、この交流を次年度につなげ、さらにオンライン交流や、交流授業のさらなる発展、SDGs の関する学びも今後は一回の発表だけでなく、継続した交流授業をオンラインなどで行っていききたいと考えている。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

【当初の計画】

韓国の学校と Zoom 交流を通して、韓国と日本のそれぞれの視点で朝鮮通信使について調べ、お互いに発表し合う。

このプランは、朝鮮通信使の歴史博物館を訪れた際に、日本側と韓国側の視点が違うのではないかと思い、調べてみるとそれぞれの知らない部分が出て来て学びになると思ったので、是非やってみたいと思った。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

【現在】

韓国の学校との対面での交流が叶い、今年度は世宗市のボラム高校が来校(1/14)、来年度は本校生徒が訪問することになった。

現在その対面交流、研修に向けて準備を行なっている。

＜プログラム＞

4 泊 5 日

- ボラム高校授業体験(2 日間)
- 企業見学もしくは SDGs 取り組み研修
- ソウル市内自主研修

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

●校内研修報告会及び今後の取り組みについての共通理解

まずは、韓国訪問の報告会を校内研修の場で行い、学校全体でユネスコの理念や韓国の教育現場の様子を共通認識する事とした。そして今年度取り組める事を学校全体や学年ごとに確認し、目指したい子どもの姿を全職員でイメージする事とした。

●音楽の授業内において

6年生を対象に「われは海の子」を釜山の小学生に紹介しよう！というねらいで授業を行い、海と関わり共に生きる街（国）である我々の共通の思いを感じ取らせたい。

●行事の中において

市内音楽会に参加する中で、日韓交流にちなんだ合唱を披露し、市内の子どもたちに世界平和や人類共存を広めていきたい。

校内音楽会において、SDGsの取り組みの中から自分たちに何か出来ないかを歌声委員会で考え、話し合って実践していく。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

●6年生の授業の中で、「われは海の子」を味わって歌おう！そして釜山の小学生にこの曲の良さを伝えよう。というねらいで授業を行った。まず、この曲を日本語で歌い、歌詞の意味を理解して豊かな海をテーマにした日本の歌を他にもいくつか歌ってみた。そこから同じ海の街釜山の小学生にこの曲を伝えようとハングル語で歌詞を作り歌ったり、曲のイメージイラストを描いたり、お互いの場所（国）が海と共に生活し、生きているという事を感じ取らせる事が出来た。

●5年生の児童全員で11月に市内の音楽会に参加した。選曲するにあたって日韓交流になるような曲や、日本の良さがわかる曲が良いと感じ、「U&I」と「ずいずいずっころばし」を選んだ。「U&I」は日韓同時開催であったワールドカップサッカーの時に平和と友好の長いから作られ、日韓の子どもたちが歌った事がスタートである。この曲を歌うにあたって韓国の歴史や文化・今の韓国の良さなどを社会の授業の中でも取り上げてもらい、教科を越えた学びの時間となった。1番を日本語2番をハングル語で歌い、市内の小学生にもこの曲を通して平和や共に生きる思いを伝える事が出来た。「ずいずいずっころばし」では四声のア・カペラで合唱して日本の歌の響きの心地よさや声部の動きの面白さを感じ取り、より自分の国の魅力を感じる事が出来たと思う。韓国の文化や芸術を学習する中で、改めて日本の魅力を感じ取る事が子供たちの感性を伸ばすことにつながると感じた。

●これから校内音楽会になるので、SDGsの取り組みの一つとして「ゴミとして捨てられるものを利用した楽器を作り、音楽会で使って発表しよう」というプロジェクトを児童が考え実践していく方向である。例えば 空き缶でシェーカーやマラカス、太鼓などを作ってみようとしている。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

今回の韓国訪問は、アフターコロナということもあってフルスペックでの交流活動が実現した。私にとって韓国と言えば、「近くて遠い国」であったが、今回の訪韓によってとても身近な国となった。現地での家庭訪問や実際の児童・生徒との交流、教師同士の交流、日本国内の教師との交流などによってこれまでの自身の偏見やイメージを大きく変えることができた。また、昨今大変不安定な世界情勢における国際間の一番不足している点は「相互の理解」という点である。今回の訪韓がその第一歩となり、今後の東アジアの平和友好の礎としたい。今回の教員による招へいがアジア地域に限らず、海外の国々との友好関係の構築や交流が世界平和につながり、持続可能な社会の担い手である子供たちを育てることにつながると思う。実際に ACCU とのご縁から佐賀県有田町と姉妹友好都市であるドイツマイセン市の現地校の校長先生の東京でのアテンドをする機会が得られ、学校視察をしていただくことが叶った。今後も様々な国々との児童の交流や教師の交流ができるように友好関係を築いていきたい。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

ドイツ現地校校長訪日をきっかけとして、日独友好のスタートを切ることができた。今後、現地校とオフライン（メール等）での間接交流を進めていきたい。また、互いの国の文化の違いを互いが尊重し合い、いつかドイツの子供たちを受け入れることができたらと考えている。

最後に、韓国、ドイツに限らず子供たちのよき地球人として国際理解教育のために広い視点を持ち、“ユネスコ憲章”にもあるように、“平和の砦”を築ける後進教員の育成に尽力したいと感じた。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

★韓国で訪問したチジョン小学校と本校の実態が少人数の学校という点で類似していた。チジョン小学校では、地域の過疎化に伴い児童数が減少し、社会性などのコミュニケーションを学ぶ機会の減少、学びを探究するといった時間が作れないことに課題を感じていた。そこで、チジョン小学校などのキョンサンナムド地域では、独自のプラットフォームを使い、少人数学校同士を地域でつなげるシステムを作り、少人数の課題解決に向けて取り組んでいた。また、教員同士もオンラインでの授業力を向上させるために研修会を行って、基礎教科の授業も輪番制で行っていたりと私には、なかった発想と実践力があつた。

私の学校も少人数であり、今後過疎化が進んでいく地域である。近隣には大規模の学校がある中で、市内でも特出して少ない。教員が深く関われる手厚さのメリットがある一方で、チジョン小学校と同じように社会性を学ぶ機会の減少や学びを総合的探究の時間の設定が課題である。そこで私は、今回の経験を生かし ICT 機器を使ったオンライン授業や国際交流、国際理解を行うというアクションプランをたてた。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

★国際交流に向け、自校の紹介動画を作成。動画の作成にあたり、自校の魅力探し、歴史など、自校のことについて探究した。その動画を編集し、同じ課題を抱える学校や国際交流を行う際の資料作りを行っている。

2月23日にはソウル日本人学校が中心となつて行う。国境なき医師団の講演会があり、その運営のメンバーに参加している。講演会に向けて、本校でも道徳の授業で国境なき医師団を説明し、世界情勢について考える授業を行い、本校からも2月の講演会に参加する生徒を集う。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

選択制海外修学旅行の訪問先として訪問国を探しているタイミングでこの研修に参加することができた。様々な学校を訪問し現地の先生との交流の中で、韓国の学校との交流の意義を強く感じ、また成功するという確信を得た。

アクションプラン

- ・2026年3月に韓国への修学旅行の実施を検討、生徒交流を含めた学校訪問を行う。
- ・交換留学を含めた教育交流協定を韓国の学校と締結

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

現在、釜山とソウルの私立の女子校と相互交流に向けて連絡を取り合っている。

- ・2026年3月の韓国ソウルでの修学旅行は実現することに決定
- ・2024年12月18日、ソウルの女子校の中学3年生とのオンライン交流を行い、その後、互いにクリスマスカード送りあった。ソウルの女子校からはクリスマスカードの他、たくさんのお菓子が一緒に送られてきた。
- ・2025年5月、ソウルの私立女子校の理事長、校長、中学教頭、高校教頭が東京の本学園を訪問するという計画を打診された。それを受けて本校からも校長がソウルを訪問する予定。
- ・2025年1月、日本と韓国の学校の文化についての合同授業を開催予定。
- ・釜山の女子校とは2025年1月よりに交流に向けて本格的に協議を行う。交換留学を含めた相互交流、協働授業、共同研究を提案したい。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

韓国では、地方の少子化が深刻化している。私が訪れたチジョン小学校では、50年前に1000人いた児童は10人に減り、このままだと閉校の危機にある。そこで、慶尚南道ウィリョン地域では、「共有教育」に取り組んでいる。14ある小中学校のうち大規模校を除く12校を4つのグループに分け、週1回のオンライン授業と中心学校に赴いての直接交流を行う。さらに、楽器に1回の郷公体験活動と体育祭・修学旅行の共同実施を行っている。「一人一人の子供を大切に育てる。誰も取り残さない」という目標の元、教員の負担も考慮しながら、自治体が中心となり、環境を整備、その結果、子供たち同士の交流が促進された。

教室内で完結しがちな教育活動を、他校の生徒とも共有し、お互いに刺激を与えあうことを目標にSNSを利用できないかと考え、アクションプランを作成しました。Instagramを利用して活動内容を発信し、コメントを送り合う。学校間交流の全段階として、国際交流員を活用して、韓国の文化について学習する。韓国で、日本語を学ぶ生徒とのSNSを通じての交流。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

- ・本校の選択講座である「韓国・朝鮮語」クラスのInstagramを開設した。個人情報保護の観点から非公開アカウント設定とし、こちらから、フォローしてほしい相手にフォローリクエストを行った。
- ・10月31日 長野市の韓国人国際交流員 高雄途氏を招き、韓国文化の紹介と韓国の伝統的な遊びであるユンノリを体験した。
- ・11月14日 韓国料理体験 調理室にて、5グループに分かれ、グループ毎メニューを考え、レシピを調べ、韓国の伝統料理の実習をおこなった。(キンパブ、ヤンニョムチキン、チーズタッカルビなど)
- ・今後はさらに、フォロワーを増やし、活動も増やし、活発に投稿していきたいと考えている。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

私は特別支援学校の病院訪問部に所属しており、地域の病院に入院している児童・生徒に授業を行っています。夏の招聘プログラムでは、見学先の高校で日本語を一生懸命学んでいる韓国人の学生達と直接話すことができました。私たちの国のことを若い世代の韓国人が興味をもってくれていることが大変嬉しく、このことを日本の児童・生徒たちが知ればきっと喜ぶのではないかと思いました。それと同時に日本の児童・生徒が韓国についてもっと興味をもってくれようような授業がしてみたいと考えるようになりました。

また釜山の特別支援学校の見学では身体活動を取り入れた「朝チェンジ」というプログラムや、地域人材を活用しながらSDGsを学ぶ授業が行われており、この様子を自分の職場の教員と共有するとともに、同じ特別支援学校としてこの先もお互い情報交換ができればよいと考えました。これらの理由から以下のようなアクションプランを作成しました。

- ①入院している児童・生徒対象に、韓国への興味を引き出す授業の実施
→韓国のことばや文字を使った学習活動、韓国の学校の様子を伝える授業
- ②教員対象の研修会（報告会）の実施
- ③教員間交流、お互い気軽に連絡を取り合える関係の継続

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

①入院している児童・生徒を対象に、「韓国の文字と折り紙体験」の授業を行いました。はじめに訪韓時の様子を写真で伝え、学校や子ども達の似ているところを知ってもらってから、日本語とは大きく異なるハングルに触れる時間を設定しました。また日本と共通する伝統遊びとして折り紙を紹介し、韓国ならではの題材「ポクチュモニ」を折り紙で折って、お正月用のグリーティングカードに仕上げました。また「韓国の人は日本のことが嫌いなのかと思っていたので、日本語を勉強している人がいて嬉しい」といった感想が聞かれました。

②夏季休業中にプログラムの様子を教員対象の研究会の中で報告しました。

③帰国後、釜山ソヌウ学校の先生とメールで何度かやりとりをしました。はじめは生徒同士の交流は特に考えていませんでしたが、校内の通学籍の中学部の教員より、もし機会があるなら生徒同士のオンライン交流を試してみたいとの話をいただき、釜山ソヌウ学校とのオンライン交流会を企画することになりました。障害のある生徒同士がオンラインでどのような交流ができるか、中学部の教員がプログラムを考え、釜山ソヌウ学校とメールで何度もやりとりし、直前に教員同士のオンラインミーティングを実施してから交流会の日を迎えました。

交流会では、まず生徒達がお互いに相手の国の言葉を使いながら自己紹介を行いました。そのあとは日本の歌を披露したり、釜山ソヌウ学校の「朝チェンジ」で行われていた「ラップ体操」を日韓の生徒が一緒に行ったり、ジェスチャークイズを行ったりしました。生徒たちはこの日の交流会に向けて韓国語での挨拶や自己紹介を練習し、毎朝教室で「ラップ体操」も練習していたので、緊張しながらもある程度見通しをもって楽しく参加することができました。韓国の生徒からは歌に感動したとの感想をいただくことができました。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

1. 児童生徒向け授業（韓国の学校や文化を紹介する授業を実施し、相違点を受けとめたり韓国により関心をもったりできるような授業をしたい）
2. 職員向け報告会
（招へい事業と韓国の教育や文化の紹介をし、韓国に関心をもつ職員を増やしたい）
3. 韓国の盲学校との交流の実現
（児童生徒のオンライン交流、できれば教師同士の交流にもつなげていきたい）

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

1. 児童生徒向け授業
7/24 長野養護学校朝陽分教室全（高等部 15 人 職員 4 人） ※併設校
9/5 長野盲学校 中高重複クラス（中 3 3 人、高 1 2 人、高 2 2 人、高 3 1 人、職員 5 人）
9/18 長野盲学校 小学部全（2 年 1 人、3 年 2 人、4 年 4 人、6 年 1 人 職員 8 人）
10/4 長野盲学校 中学部 1 年クラス（3 人 職員 2 人）
＜主な授業の流れ（触れる時間の十分な確保と年齢や関心に合わせた時間配分や内容を工夫）＞
(1) クイズで知る韓国（学校生活や歴史・文化等）20 分
(2) 韓国の言葉を知ろう（あいさつ、ハングルのなりたち、自分の名前を書いてみよう）10 分
(3) 韓国文化体験（試食、衣装試着、楽器体験、遊び等）15 分
(4) 感想・気づき等の共有 5 分
2. 職員向け報告会
12/3 16:00-17:00 自主参加型研修「隣の国韓国を知ろう！」（職員 8 人）
3. 韓国の学校との交流
10/8 9:50-10:20 ソウル盲学校中学 2 年 5 人とオンライン交流授業（中学 1 年 3 人 職員 2 人）
内容：自己紹介・学校長参加／自己紹介・学校長参加
11/8 9:50-10:20 ソウル盲学校中学 2 年 5 人とオンライン交流授業（中学 1 年 3 人 職員 2 人）
内容：学校紹介と自己紹介（好きなもの）／自己紹介（好きなもの）
12/20 9:50-10:30 ソウル盲学校中学 2 年 5 人とオンライン交流授業（中学 1 年 3 人 職員 2 人）
内容：琴の説明と「さくら」の演奏・フリートーク／韓国の年中行事紹介
11/20 ソウル盲学校寄宿舎生とオンライン交流（寄宿舎生女子 3 人 職員 3 人）
内容：フリートーク（自己紹介、お互いの寄宿舎生活の紹介や質問等）。
1/3 ソウル盲学校訪問（対面） 10:00-12:00（職員 7 名）
内容：学校概要説明、中学 2 年クラス合唱発表、校内参観（図書館、印刷室、理療科授業）

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

キメ外国語高校を見学させていただいたことで、生徒が主体的に探究的な学習に取り組む姿に大変驚いた。本校においては、中学それぞれの学年で行う校外学習の取り組みを一貫して同一の目的：「PR動画の作成」で行い、探究的な学習に対する取り組みを学年が進むにつれ、成長を実感できるようにしていく。

慶尚南道ウィリョン教育支援庁とチジョン小学校を見学させていただき、オンライン授業やタブレットを活用している様子を見学させていただいた。本校において、不登校傾向のある生徒や出席停止の生徒に対して要望があれば授業をオンラインでつなぎ、また、そのような生徒に家庭学習ができるアプリケーションを提供し、進路選択の一助とする。

釜山ソヌウ学校・キメ外国語高校を見学させていただいて、両校ともSDGsの活動に積極的であり、校内にその活動の様子が見られた。本校でも、行っている活動を「見える化」し、全校生徒や地域・来校者に本校の活動を知ってもらい、より自発的な活動が行えるようにする。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

校外学習での探究的な学習においては、本市を中心にマインドマップを作成し、本市の魅力をあげていく。その後、本市が大切にしている考え方や取り組みを調査し、その関連施設を校外学習で訪れ、PR動画を作成していく。同様な流れを今後の校外学習でも行っていく。目的と手法を同じにすることで、前年度の反省や改善が次年度へ反映されやすく、生徒の自発的な探究活動につながると考えている。

オンライン授業やタブレットを用いた学習においては、不登校傾向の生徒や出席停止、病院への入院等で出席ができなくなってしまった生徒へタブレットの貸し出しを行い、オンラインで授業に参加できる体制を整え、運用が開始された。また、所属教育委員会から2つの家庭学習アプリケーションを提供していただいたことで、不登校傾向のある生徒が興味をもって家庭学習に取り組める環境を整えることができた。不登校支援の担当が学習の進捗を確認し、担任と相談をしながら支援を行える環境を整えた。今後は、その支援が継続され、進路選択の一助となるか実証していく。

SDGsの活動に関しては、生徒会及び生徒委員会の活動において、SDGsとの関わりを確認。活動内容とSDGsのNo.を入れたポスターを作成し、校内に掲示した。その中で、新たな取り組みのアイデアも生まれた。今後は学校ホームページや地域の方へ向けた案内等を作成し、地域と協力した活動を行っていく。最終的には、ユネスコスクールのネットワークを活用し、他校との交流を行えるような活動に広げていきたい。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

韓国の文化や現地の学校の様子を日本の子供たちに伝える。

今回は体験で学校の給食を食べることができた。日本の学校との違いは辛いかな辛くないかが大きな違いであった。日本の子供たちも食べ物には強い興味を示す。そこから文化や生活、歴史について伝え平和について考える機会を持ちたいと考えている。

支援学校の子供たちが外国に行って実際に現地を訪れたり、交流したりすることは難しい。掲示物などをはじめ様々な形で交流を行うことで外国を身近に感じ、平和について考えられるようにしたかったから取り組んだ。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

韓国の給食を紹介した。そこから、なぜ味付けが辛いのかという視点で興味を持ってもらうことができた。また、当校で作成した巨大折り紙が韓国で鶴になったことを伝えると子供たちがとても喜び外国の文化に興味を持ったり、外国との交流に興味を持ってもらえたりした。

支援学校の生徒は職に強いこだわりを示す。職のこだわりを学びにつなげることで文化を学習する意欲を醸成することができた。

現在ソウル市の支援学校との交流を計画している。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

私にとって、今回の「韓国政府 日本教職員 招へいプログラム」における経験は、私の人生や教員生活においてターニングポイントになるような出来事であったといえるくらい、全てが貴重で、かけがえのない経験であった。私自身、韓国に行ったことも、韓国の先生方や子どもたちと交流したことも全てが初めてであった。その中で特に、韓国の魅力や、韓国の先生方や子どもたちからの「日本のことが大好きです。この気持ちを、日本人にも知ってほしい。」というメッセージを、「少しでも多くの人に広めて、日韓の架け橋になりたい。」という思いが帰国してから更に強くなり、次のようなアクションプランを作成した。

【アクションプラン】

- ①韓国での学びを教職員間で共有する「校内研修」の実施
- ②韓国・龍南小学校との国際交流
- ③韓国・金海外国語高校との国際交流
- ④学校図書館に「The Charm Of Korea」を作る
- ⑤韓国での学びを全校児童に伝える「イベント」の開催

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

実践①韓国での学びを教職員間で共有する「校内研修」の実施

9月9日に「慶尚南道・釜山の教育」というテーマで、①韓国派遣プログラムでの経験や学びの伝達 ②2学期から龍南小学校と金海外国語高校と国際交流することの共有 を実施

実践②韓国・龍南小学校との国際交流 ※1月10日「ヨンナム♥山手国際交流同好会」発足

(9月20日) 本校5年生が「We Love Korea」というテーマでQuestionビデオ

(10月25日・28日) 龍南小学校5年生から「We Love Japan」というテーマでAnswerビデオ

(10月30日) 国際理解教育の授業で龍南小学校5年生からのビデオを使用

(11月14日) 全校で「Movie Festival」という形で、龍南小学校5年生からのビデオ鑑賞

(11月末～12月中旬) 本校3年生が「We Love Fukuyama」というテーマで紹介ビデオ

実践③韓国・金海外国語高校との国際交流

(10月17日) 本校5年生と金海外国語高校の日本語クラスが、お互いの国の好きなところの発表・質問をし合うオンライン交流

実践④学校図書館に「The Charm Of Korea」を作る

(11月22日～) まず、国際交流している韓国・龍南小学校がある統営市の写真などを展示次に、韓国派遣プログラムで訪問した慶尚南道の魅力を伝える空間づくり

実践⑤韓国での学びを全校児童に伝えるイベント「Korea Study Tour」の開催

(12月3日～20日) 韓国派遣プログラムでの学びをパワーポイントで全校児童に伝達

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

訪問を通して感じたことのひとつに、対面で交流をして得られることの大きさがあった。生徒達にも多くの交流の機会を与えることが重要と再認識し、その為には校内での協力体制の構築が不可欠であると考えたため、今後の展望の1)として校内外への教職員への経験共有を挙げた。4)現地の高校との周期的なオンライン交流の運営については、対面での交流=3)スクールビジットの受け入れ、に向けた準備の一環と考え挙げた。2)校内における地球市民教育の強化については、現地での先進的な取組を目の当たりにし、本校の生徒にも是非実践したいと考え、アクションプランとして挙げるに至った。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

地球市民教育については、総合的な探究の時間での3年間の取組を再編すべく動きだしているところである。探究の時間に地球市民教育をより盛り込む方向性で計画中である。現地の高校とのオンライン交流については、ようやく11月に実施できたところである。帰国後より、釜山のナムソン女子高等学校の生徒たちとお互いの部活動(同好会活動)を中心に交流を続けている。1月末に18名の生徒と3名の教員が釜山よりスクールビジットとして半日訪問していただくことになり、現在詳細を調整中である。ナムソン女子高等学校とは、8月末より手紙や学校紹介の動画を交換という形で交流を開始し、ZOOMでの顔合わせまで行った。本校の生徒は韓国語、ナムソン女子高等学校の生徒は日本語と、つたないながらもお互いの言語で交流を行った。周期的なものになるようにしていきたいところだが、日韓のスクールカレンダーのずれや、共通テストとスヌン(韓国における共通テストのようなもの)の時期のずれにより中々調整が難しかったため今後も困難が予想される。しかし、オンライン交流実施当日の両校の生徒の笑顔、姿、実施後の感想などを聞くにつれ、交流の絶大なる効果を感じ、困難を乗り越えより一層の交流を推進すべきであると感じている。周期的・継続的なものとなるように、更に綿密に打ち合わせを行って行きたいと考えている。その為には校内の協力体制も不可欠であり、呼びかけを根気強く行っていこうと考える。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

＜やりたいこと：自分の体験を共有する＞

韓国の学校や韓国の方々と交流を持つ中で、自分が感じたことを同僚や生徒たちに伝えて、自分の知っている世界以外の世界もあることを知ってもらいたいと思い、様々な場所で報告の機会を持ちたいと思いました。また、実際に韓国に行って直接韓国の方々と触れ合う中で、ニュースなどで取り上げられるような反日の感情を持った人たちばかりではなく、日本に対して、私たちに対して非常に友好的に接してくださる方もいることもお伝えしたいと強く思いました。

生徒たちにとっては、韓国は憧れの推しがいる国で、あまりネガティブな部分を知らないの、若い世代には、直接交流を持つ中でお互いのことを知ることがこれからの日本と韓国の関係が良くなっていく糧になってほしいとの願いもあります。

また、私自身、日々の仕事が忙しい中でも今回のプログラムに参加して、多くの経験をできたので、生徒にも大変だけれども様々なものにチャレンジをして、とにかくやってみることの大切さも伝えたいと思いました。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

職員会議で同僚の教員への報告をし、多くの反響をいただきました。忙しい中でも多くの経験をしてきたことをシェアできたので、みなさんへの刺激にもなったようです。

また、生徒にも朝の礼拝の時間に5クラスでお話をしました。実際に韓国で経験したことを記憶の新しいうちに話すことで、興味をもって聞いてくれました。

今後は、韓国の生徒と直接交流が持てるようなプログラムを考えて実行したいです。

しかし、日々の仕事が忙しくてなかなか計画できないのと、学校に「国際交流」の部署があり、私はそこに所属していないので、今までやっていない韓国とのプログラムをやろうと言いくい部分があります。

しかし、インフラとして、来年度に図書室にZOOMなどネット越しに交流するための部屋が完成するため、ぜひ、それらを活用して、韓国の学校と交流をしたいと考えて、今から根回ししています。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

日本教職員韓国招へい研修プログラムの中で、ワークショップ「ユネスコ世界遺産教育と地域で作る平和」が印象深い。特に講演で、世界遺産はそれぞれに「ストーリー」を有していること、またその解釈をめぐる時には議論になる、と講師がおっしゃったことが印象に残っている。7月に佐渡島の金山が世界文化遺産に登録されたこと、登録をめぐる日本と韓国で捉え方が異なることを踏まえて、アクションプランとして佐渡島の金山を題材にした授業を計画した。世界遺産を題材とする授業を通じて、2カ国が異なる主張をする時、どのような歩み寄りができるかを考えさせたい、と思った。授業の内容は以下のとおりである。

実施日：令和6年12月19日

対象：普通科1年生36名（「公共」の授業内で実施）

テーマ：佐渡金山 世界遺産登録をめぐる議論

目標：異なる歴史認識を持つ日韓両国がどのように合意形成を図ったのかを理解する。

活動：①資料（新聞記事）講読

②日韓それぞれの主張を整理する

③異なる主張をする2カ国が歩み寄るには、どのようなことを必要かを考える

私は、高校で地歴公民科の授業を担当しており、専門は世界史である。アクションプランの授業の対象は、当初3年生を想定していたが、1年生の「公共」の授業で国際分野の単元を扱うこと、12月に入り韓国の政治動向がニュースで取り上げられるようになったことを踏まえて、対象を1年生に変更した。

また、私の勤務校は普通科と防災の専門学科（環境防災科）を併設している。環境防災科の生徒にむけた授業も計画したが、残念ながら授業のスケジュール調整がきかず、今年度中の授業実現は難しい。計画した授業は下の通りである。実施は来年度に持ち越したい。

テーマ：韓国の高校生との防災を通じた交流

目標：異なる文化的背景を持つ人々に対し、有益な防災情報を提供する。

活動：異なる言語圏の人に、日本の災害・防災事情を分かりやすく伝える。

交流方法：本校生徒がまとめた作品はデータ化し、韓国の高校にお送りする。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

アクションプラン（国際理解のための授業）記録

実施日：令和6年12月19日1校時（8:55～9:45）

対象：普通科1年生36名

テーマ：佐渡金山 世界遺産登録をめぐる議論

目標：異なる歴史認識を持つ日韓両国がどのように合意形成を図ったのかを理解する。

授業内容

経過時間	生徒の活動	指導の留意点等
開始	●問い①「なぜ、今年の漢字に『金』が選ばれたのか」 →補足「佐渡島の金山の世界文化遺産登録も理由の一つに挙げられる」	プラス（五輪金メダル）とマイナス（政治の裏金問題）の理由が挙げられることを理解させる。また、新潟県のHPを見せ、佐渡島の金山の世界文化遺産登録が祝福されていることを確認させる。
15分	本時の活動の趣旨説明、ならびに3～4人組のグループを編成する。	
25分	●問い②「佐渡島の金山の世界文化遺産登録を快く思っていない国もあるが、それはなぜか」 →各グループに資料A～Dを配布。一人1種類の資料講読を担当し、5分間で内容をまとめる。	4種類の資料を使って、事実関係を整理させる。
45分	●資料から読み取れたことを発表する。 資料A：東京新聞社説（2021/7/29） 資料B：東京新聞記事「佐渡金山の世界遺産登録、韓国合意の影に2015年の教訓」（2024/7/27） 資料C：社会新報「佐渡金山の世界文化遺産登録に異議あり」（2024/8/20） 資料D：NHK NEWS「佐渡島の金山めぐり」追悼式に韓国政府代表者の欠席は残念」（2024/11/25）	1 資料あたり3人ずつ発表させ、適宜補足する。 次のポイントも考えさせながら、整理していく。 ・韓国政府が世界遺産登録になぜ反発するのか。 ・日韓両政府はどのように妥協点を見出したのか。 ・登録決定後の韓国国会議員団や追悼式の動向から、韓国の国民が佐渡島の金山の世界文化遺産登録に納得していると言えるか。
50分	●問い③「今後、日韓両国が歩み寄るには、どのようなことが必要か」 →各自の意見を付箋紙にまとめる。	授業後、付箋紙を回収する。

生徒からは次のような意見が出た。

- ・遺族に寄り添う。
- ・強制労働の「真実の歴史」を示し、金山を訪れた人に知ってもらう。展示する資料を増やしたり、ホームページに記載したりする。
- ・悪いことは悪かったと、国が認めることも必要。
- ・国民自らが関心を持つことも大事。今日の授業のようなきっかけ作りをしていく。
- ・日本の教育のためにもきちんと展示する。また、展示内容を両国で話し合ってはどうか。
- ・第三国に協力してもらう。他の国も交えて議論する。
- ・日本は「強制労働はなかった」という主張を変えるべきでない。
- ・展示を見たら、韓国側も少しは納得するのではないか。
- ・過去に縛られる必要はない。
- ・日本は強制労働があったことを認めて、今後このようなことを起こさないようにする。

- ・日本政府の協力要請に対して、韓国政府も応じてほしい。
- ・日韓の交流の機会を増やす。国民同士の文化交流。
- ・韓国側が納得いく展示内容にする。韓国が納得しなければ登録を破棄する。
- ・追悼式を毎年行うこと。
- ・韓国が譲歩してくれたのに、その後の日本の対応が冷たいと思った。
- ・日本人が一定数韓国に行って働く。

生徒たちは、本時の授業だけで事態の全容をつかめた訳ではないが、日本・韓国どちらかに偏ることなく、クラス全体で多様な意見が出たことは成果であると考えます。世界遺産を題材にした授業で、より良い国際関係構築について考えるきっかけとなった。上記の生徒の意見は、3学期の授業でフィードバックしたい。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

- 校内教員研修や授業で、韓国での経験を共有する。
- 総合や探究学習、理科の授業で「ESD」の視点を取り入れる。
 - ・主体的・対話的で深い学びの視点から、今よりも更に Learners-Centered の授業を展開する。
 - ・様々な問題を自分ごとと考えられる生徒の育成のため、仲間の理解にも努力できるような授業を設計する。
 - ・学校全体に対して提案できるよう、積極的に研究授業を行う。
- 世界平和への第一歩は、草の根での交流であることを生徒に伝える。
 - ・姉妹校交流など国際活動へ積極的に参画する。
 - ・ソロモン諸島やシンガポールと併せ、自らの経験を語る。

1つ目のプランについては、自らの経験を周囲に伝えるということが最も簡単で、相手に伝えやすい方法だと考えたから設定しました。

2つ目のプランについては、私が最も興味をもって取り組んでいる分野が授業改善だから設定しました。韓国研修に参加する前から、担当する理科の授業の中で、理科以外の力をどのように育むべきか考え、授業実践をしてきました。韓国研修では、ICTの推進やプレゼンテーションに取り組む生徒たちの様子から、生徒たちが中心となる教育を進めることがそのための大きな方法の1つであることを再確認できました。私のキャリアを通して授業方法の改善を行い、他の先生たちにも広めていきたいと思います。

3つ目のプランについては、「国際」という分野が私の教員としてのアイデンティティの1つだと感じることから設定しました。私は、青年海外協力隊としてソロモン諸島、日本人学校教諭としてシンガポールでの勤務経験をもっています。それぞれかけがえのない経験でした。また、その2つの国での経験を併せ持っている教員は、日本にはほとんどいないと考えられます。その上で、韓国研修という経験も得ることができました。私がもつ経験を次世代の生徒たちに伝え続けることや、国際交流という教育活動を深化させていくことを大きな目標としています。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

1つ目のプランは、鋭意実行中です。教員・生徒ともに、研修会を含め様々な場で折りに触れてお伝えしてきました。

2つ目のプランは、時間をかけて授業をブラッシュアップしていきたいです。生徒たちを育てるために、何をすべきか、また何をしないべきか、考え続けています。

3つ目のプランは、校内でのポジションに左右されます。一教員として、様々な経験を伝えたり、総合・探究の授業などでそれらを教材として利用したりすることは、継続していきたいです。国際担当として働くことができる時が来たら、学校を挙げて国際理解教育に取り組めるよう、経験を活かして学校を引っ張っていきたいと思います。勤務校は既に韓国の姉妹校を2つもち、それぞれとの国際交流が行われています。そこで、現在とは異なる国との交流はもちろん、現在行われている国際交流とは異なる視野をもった活動を創出し、実行に移していきたいです。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

本プログラムに参加したいと思った理由は、隣国である韓国のユネスコスクールでの取り組みを知り、勤務校での活動の参考にしたいと考えたからだった。韓国の学校を視察し各学校の行っている素晴らしい取り組みを知る中で、自分の感じたことを生徒たちにも直接感じてもらえるようなプランを考えるようになった。アクションプランは、本校で行っているグローバル教育での学びと韓国の高校生との交流を結びつけ、教員も含めたすべての人が関わりを持てるようなプログラムを構築できるよう、2026年度からの開始を目標に作成した。すぐに検討を始められるよう、7月の職員会議にてプログラム参加の報告をし、本校でのグローバル教育に韓国との学習交流を加え、より充実したものにしていくことを共有した。2学期からは、交流校の選定、交流内容の検討を行っていく予定を立て、2025年度には授業単位での小規模な交流を始められるよう準備をすることとした。学習交流の内容に関しては、本校で行っていることを基に、韓国側の希望とすり合わせる必要があるため、まずは同じような取り組みをしている学校を探すことから始めることとした。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

8月に一緒にこのプログラムに参加された先生から韓国の学校を紹介していただくという幸運に恵まれ、9月から先方の学校との打ち合わせが始まった。まずは授業内での学習交流から始めることにして、2学期から韓国の女子高校の日本語授業1クラスと本校の英語授業1クラスとの小さな交流を企画した。内容はSDGsに関する探究学習で、最終的には共同プロジェクトとしてまとめることになった。現在は、自己紹介やオンラインでのミーティングが終わり、関心のあるSDGsゴールの学習に入ったところである。1月には同校の韓日高校生国際交流チームの生徒14名が来日する予定で、本校への訪問も組み込まれている。オンラインだけでなくリアルな交流まで実現することとなり、予定していたよりもスムーズにそして内容の充実した学習交流ができることは、担当の先生の熱意と行動力のおかげである。本校での準備でもできるだけ多くの教員に関わってもらい、授業担当者だけでなく学校全体として興味を持ち、取り組めるような雰囲気づくりを構築していきたい。2025年度は年度を通した授業交流や2学年でのグローバル教育の中で共同プロジェクトができるよう、計画を立てていく予定である。将来的には相互の学校訪問や交換留学などにも発展させていきたいという目標もできた。次世代を担う高校生がより広い視野を持ち、国境を越えて社会問題について話し合い、解決法を見出す力をつけるために学校ができることを少しずつ実行していきたい。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

韓国訪問期間で得た経験をもとに、3つのアクションプランを考えた。

1つ目は、校内での情報共有である。本研修をととして学んだ探究学習やSDG sにつながる活動について、他の先生方と共有をすることで、今後の教育活動に生かすことができるのではないかと考えた。環境が異なるため、韓国での実践をそのまま行うことは難しくとも、考え方や方法を取り入れることで、より充実した活動につながるのではないかと考えた。

2つ目は、「八千代子どもサミット」での情報共有である。私の勤務校がある八千代市では、「八千代子どもサミット」という市内の小中学校に通う児童生徒の代表が集まり、地域社会の課題について考え、解決に向けた取り組みを行う活動がある。そこで、地域の先生方に情報共有をし、勤務校が所属する地域で国際交流につながる活動ができればと考えた。

3つ目は、後期の生徒会活動で国際交流につながる活動を実施することである。生徒たちが他国の人や文化に直接触れ合う機会はあまり多くないと思われるため、国際交流につながるような活動を行うことで、生徒たちの異文化への理解を深められるのではないかと考えた。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

アクションプランの中で、2つ目に挙げた「八千代子どもサミット」での情報共有については、ソウル市教育庁が行っている国際共同授業について、共有することができ、今年の12月に行われた市内の中学生が集まって行う「リーダー研修会」の内容に組み込んでいただくことができた。生徒たちは韓国の中学生とオンラインで交流することができ、初めは戸惑う様子もあったが、日韓の共通点を感じたり、多文化と関わることの面白さや大切さを実感する様子が見られた。

一方で、1つ目と3つ目に挙げたものに関してはまだ取り組むことができていないため、今後実現に向けて準備を進めていきたいと考えている。

1つ目に挙げた、校内での情報共有については、校内研修のようなまとまった形ではなく、行事の企画や委員会のキャンペーンなどを行う際に、経験してきたことを生かせるようにしたいと考えている。そのために、再度韓国で見聞きしてきたことの中で、今の環境の中で取り組むことができそうなものを整理し、準備をしたいと考える。また、3つ目の生徒会活動については、勤務校が大規模な学校であるということもあり、直接の交流は少し難しい部分があると考えている。しかし、フォローアップミーティングで紹介のあった手紙での交流や、他の文化を調べるなどといった取り組みも、生徒の異文化に対する理解を深めることにはつながると考える。まずは生徒会役員の生徒たちと、どんな取り組みを行ってみたいかを話し合い、企画していきたいと考える。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

令和6年7月9日から5日間の韓国政府日本教職員招へいプログラムでは、Bチームでユネスコスクールの特例支援を主に学校訪問を実施した。グループで巨大折り紙の授業を実践した。そこで、「韓国での学びを100%教育と医療に活かす!!」をテーマとした。生徒には、①韓国を知る学ぶ②在日韓国人を知る③在日韓国人と医療を深める、以上の3点をアクションプランとして進めた。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

本校生徒は100%看護師を目指す生徒であり、埼玉県に在留外国人は全国で5番目に多く、実習施設である病院でも、多くの外国籍が通院や入院するようになってきた。韓国は在留外国人の中でも4番目に多く、生徒も音楽や映画などで身近に感じており、韓国語を勉強している生徒もいる。今回の授業実践では、在日韓国人のための保健指導（パンフレット作成）を実施した。韓国の基本情報や教育・医療について、学習を深め、グループで発表した。これまでは机上での学習が主であったが、今年度は今プログラムでの実際を踏まえて展開できた。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

本プログラムに参加後、私は3つのアクションプランを立てました。1つ目は、生徒への還元です。グローバル・スタディ科の教員として、授業での国際理解教育を推進してきましたが、生徒達にとって、教室の中での学びはどうしても現実性に欠けていました。また、海外へ行くことへの恐怖や、日本語を母国語としない人々の存在感することが難しいため、言語学習への意欲も薄いこと、「今後もずっと日本から出るつもりがないから関係ない」といった考えの定着が課題となっていました。そこで、韓国の様子、現地の学校現場や生徒達の動画等を見せることで、海外を身近に感じさせられるのではないかと考えました。学校という限られたコミュニティで、毎日のクラスメイトとの人間関係作りや勉強、学校行事がすべてである子ども達にとって、海外にも同じように生活をする同年代の人たちがいるのだ、と知るきっかけに、そして、身近な大人が国外での活動を積極的に行っている、楽しんでいる、ということを、彼らに知って欲しいと思いました。今後は、少しずつ韓国の生徒との交流の機会をもつことができるよう、提案しています。

2つ目は、教職員への還元です。中学校は、専門教科教員が集まるため、外国語科教員以外で海外に興味のある教員は少なく、本プログラム参加についても、まだ理解は少なかったです。そこで、子ども達への共有の時間に、先生方にもお声かけをし、聞いていただきました。さらに、各教科担当の教員に授業で活用できる提案をお話しさせていただきました。例えば、社会の授業で、韓国の教育についてのコラボ授業や、世界遺産教育を提案したりしています。

3つ目は、学校への還元です。本校は、今回訪れた慶尚南道の学校のように、生徒数の減少による人間関係の希薄化が課題です。そこで、慶尚南道の教育についてを管理職に共有し、同じ現状を抱える近隣の中学校と連携をし、共有教育を行う方針で、学校改革を行うために計画を立てています。地域との共有教育に向けた活動と共に、韓国の学校との姉妹校提携に向けても動いていきます。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

韓国との交流を経て今後取り組んでいきたい活動について韓国の中学生とのオンライン交流を挙げました。内容としては、1 韓国の生徒会との交流（学校紹介や行事の紹介、よりよい学校を作るための案作りなどを協働して行う）、2 学級単位での交流（英語科でお互いの住んでいる町の紹介、音楽科で架空のアーティストを作りマーケティング案を考える）です。この取り組み（アクションプラン）の考案の背景としては、私自身がこのプロジェクトに参加したことで、国や言語が違って同じことを考えたり悩んだりし、思いが通じ合う喜びを感じたからです。そしてユネスコスクールとしての取り組みの話を聞いたり掲示物を見たりして、視野や考え方が広がったことです。その素晴らしさ、楽しさを生徒にも味わってみたいと思ったことが一番の理由です。また、1に関しては、在籍校がある市内では市内の中学校生徒会交流会があります。その経験を活かしながら、既習した英語の文法や韓国語を用いて交流し、その様子を生徒会だよりや掲示物で発信したり、次年度の6月に行われる市内の交流会で発表したりするなどして学校から市へと発信していけたらと考え、設定しました。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

実施した内容としては、教科書等の写真・動画の交換やオンライン交流です。オンライン交流に関しては、学校内で相談をした結果、学級間の交流になると交流しない学級が出てきてしまうため生徒会生徒と希望制で行うことになりました。3月の卒業式後に行う予定で職員会議にて全職員に周知しました。しかし、連絡を取り合っていた韓国の学校（京畿道南揚州市禮峰中学校）が長期の冬休みと3月で新学期になるため、事前にテスト配信を兼ねて1月8日（水）の放課後に生徒会の生徒7名と個人で韓国語を学んでいる3年生の生徒2名と行いました。自己紹介、英語のゲームをして、最後にお互い質問をする中で共通の好きなアニメや歌手で盛り上がるなどとても有意義な時間を過ごすことができました。今後の予定としてはオンラインをつなぐ中で生じた接続トラブルの対処法（座席の配置や声の大きさ、聞き取れなかった時の対処法や定型文など）を考え、共有しあって3月の準備をしていきたいと韓国の担当の先生と話をしています。また、生徒の下校後は教職員同士でも交流を行う予定でいるので、先生方へ韓国の先生に聞きたいことなどを事前にアンケートをとるなどの準備を行っていくつもりです。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

○校内研修の実施

地域の材（人・もの・こと）を活かしている学校現場を見て、改めて所属校の周囲に目を向けようと思い、校内研修を実施した。夏休みに校内研修を実施し、学校全体として多くの目で地域の材や可能な取組について考える時間を作るきっかけとなった。

○子どもと共に文化理解

今年度の学級の実態として、外国語につながる児童が複数名おり、日本の文化の良さを改めて感じつつ、互いの文化に対して、理解を深めることで「誰一人取り残さない」学級作りにつながると考えた。また、今後の社会を生きていく中で、他国の文化に対してハードルを上げずに、フラットに考えられる子ども達を育てていきたいという思いが高まったため。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

○校内研修の実施

帰国後すぐ所属校で夏休みの校内研修の時間を設け、韓国の教育現場との共通点や相違点を伝え、特に大切だと感じた地域社会との協力（人との出会い）について教職員がイメージをもちやすいように話をした。今後の学習において、活用できそうな地域の材について職員で改めて考えることができたと思う。また、本プログラムで学んだことや参加した方々の学校での取組の話を聞き、所属校でも実施できそうなことを校内のESD推進委員会で提案していきたいと考えている。さらに、韓国との懸け橋になることができるよう、今回のプログラムでの関りを大切にしていきたい。

○子どもと共に文化理解

今年度は総合的な学習の時間を主に、「食文化」という視点で異文化理解を進めていった。日本の食文化への理解を深めていくことで、良さに気づくだけでなく、他国の食べ物について興味をもち、進んで調べている児童の姿を見ることができた。しかし、韓国との交流という面では言語の壁やICTの活用という面で不安な部分も感じられるので、しっかりとした準備が必要になると感じている。

1. 韓国訪問期間中の経験をもとに作成したアクションプランの内容

(近い将来実現したい事)

- ・ 対面での日韓高校生の相互対面交流（4泊5日程度の訪問&受け入れ）
- ・ 修学旅行先として韓国の設定（学校訪問、民泊、韓国文化体験など）
- ・ 部活動交流（所属校で活発に行われている部活動が盛んな韓国の学校をリサーチ）

※これらは、現在の所属公立学校では実現が難しいため、次異動する学校もしくは国際教育に積極的な私立高校で実現したい。

2. アクションプランの実現に向けた現在の取り組みについて

9月10月：釜山観光高等学校、金海外国語高等学校とのオンライン交流を実施。

校内で夏前から「韓国語研究同好会」として正式に部活動として発足し、部員獲得の為、新1年生に向けて開催した。その結果、6名の新入部員を迎えることができた。

9月：日韓交流友好祭りにボランティアとして参加

11月～現在：2月に開催される「話してみよう韓国語」大会（韓国文化院主催）の東京大会予選を通過するため週に1度、原稿作りから発音練習を実施。特別講師として東海大学の韓国人留学生2人に来校してもらい文法や発音指導を指導してもらった。今月には、大韓航空の現役CAの方に来校してもらい、特別講義を実施予定。

備考：都内の複数の私立高校と釜山の高校との交流実現のため、間に入り両校を繋げることができた。今後の展開がとても楽しみである。

資料編

参加者リスト

A グループ			
No.	氏名	所属	職名
1	増田 恵津子	明石市立魚住東中学校	校長
2	阿部 みどり	杉並区立杉森中学校	主任教諭
3	村井 悟志	東京都立足立西高等学校	主幹教諭
4	檀山 光博	目黒区立菅刈小学校	事務主任
5	神保 智美	新潟県立国際情報高等学校	教諭
6	山本 正太	神戸市立横尾小学校	教諭
7	三原 忠	開智中学・高等学校	教頭補佐
8	高木 慶子	横浜市立横浜総合高等学校	教諭
9	上田 沙也加	奈良県立山辺高等学校	教諭
10	大貫 一枝	日光市立藤原中学校	学校事務職員
11	久原 巳季	愛知県立昭和高等学校	教諭
12	渡邊 由衣	延岡市立黒岩小学校	教諭
13	圓山 裕史	奈良市立伏見小学校	教諭
14	浦川 伸子	長崎東高等学校	教諭
15	アフリディ マシヤール	名古屋大学教育学部附属中・高等学校	教諭
16	町田 登志子	千葉県立松戸国際高等学校	教諭
17	唐木澤 瞳	長野県中野西高等学校	教諭
18	坂本 交司	奈良教育大学附属中学校	教諭
19	氏田 洵悠	大分県立大分上野丘高等学校	教諭
20	今関 雄太	渋谷教育学園幕張中学校高等学校	教諭
21	富山 玲	武田中学校 武田高等学校	教諭
22	小西 智子	日本体育大学柏高等学校	教諭
23	宇津野 志保	神奈川県立新栄高等学校	教諭
24	室岡 優輔	文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員免許・研修企画室法規係	係員
25	蓮見 詩保子	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センタ ー	プログラムオフィサー

B グループ			
No.	氏名	所属	職名
26	田邊 智子	八千代市立西高津小学校	教諭
27	上田 敏廣	稲城市立若葉台小学校	校長
28	井越 規之	東京都町田市立武蔵岡中学校	主任教諭
29	東 敬祐	実践女子学園中学校高等学校	教諭
30	小宮山 裕美子	長野市立長野高等学校	教諭
31	阪口 菜津子	東京都立小平特別支援学校武蔵分教室	教諭
32	丸山 妙子	長野県長野盲学校	教頭
33	松村 孝幸	多摩市立多摩永山中学校	主幹教諭
34	廣瀬 龍太郎	神戸市立いぶき明生支援学校	教諭
35	橋爪 伸幸	関西創価中学校	教諭
36	石橋 佳奈	福山市立山手小学校	教諭
37	青田 祐子	京都府立西乙訓高等学校	教諭
38	静 詩葉	恵泉女学園中学・高等学校	教諭
39	鈴木 あかね	兵庫県立舞子高等学校	教諭
40	亀山 勇	桜美林中学校・高等学校	教諭
41	木内 美穂	東洋女子高等学校	教頭
42	四方田 実希	八千代市立大和田中学校	教諭
43	牛坂 留都	埼玉県立常盤高等学校	教諭
44	西田 朋加	さいたま市立慈恩寺中学校	教諭
45	土谷 沙織	千葉市立轟町中学校	教諭
46	鈴木 知美	横浜市立幸ヶ谷小学校	教諭
47	高田 一磨	神奈川県立厚木西高等学校	教諭
48	栗林 正	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	国際教育交流部 部長
49	金子 千尋	文部科学省 初等中等教育局 学校デジタル化プロジェクトチーム学校デジタル化総括係	係員
50	田代 成香	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	プログラムオフィサー

プログラム関係機関

<日本側機関>

文部科学省/Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan

駐大韓民国日本国大使館/Embassy of Japan in Korea

<韓国側機関>

韓国教育部/Ministry of Education, Republic of Korea

韓国ユネスコ国内委員会/Korean National Commission for UNESCO

駐日本国大韓民国大使館/Embassy of the Republic of Korea in Japan

<訪問機関>

チルウォン高校/Chirwon High School

金海外国語高校/Gimhae Foreign Language High School

ミルジュ小学校/Milju Elementary School

チジョン小学校/Jijeong Elementary School

ウポ生態教育院/Upo Ecology Institute

慶尚南道教育庁未来教育院/Future Education Institute of Gyeongsangnam-do Office of Education

ウィリョン教育支援庁/Uiryeong Office of Education

知恵の海図書館/Masan Sea of Wisdom Library

幸せ村学校/Happy Village School

チャンウォン芸術学校/Changwon Art School

チャンウォン自由学校/Changwon Freedom School

釜山ソンウ学校/Busan SungWoo School

<企画・実施・運営>

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/
Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)

文部科学省委託 令和 6 年度 新時代の教育のための国際協働プログラム
初等中等教職員国際交流事業
韓国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書

2025 年 3 月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email exchange@accu.or.jp

URL <https://www.accu.or.jp>

©2025 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)